ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第200号（２０２３年１月）記念号

【はじめに】２００号を向かえて

ふるさと風の会は今回二〇〇号を迎えました。２００６年６月に「ふるさとルネッサンス」として10ヶ月、その後「ふるさと〝風〟」として190ヶ月、計16年８ヶ月もの長きに亘って会員各位が毎月記事を書き、自分たちで執筆・編集・印刷・製本・配布を続けて来ました。「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を軸に、会員それぞれの思い・志を出来るだけ大きな声で言って行く活動を続けて来ました。会員はほぼ全員、毎回記事を書き続けました。そして当然読者の皆様からご批判をいただくこともあります。そんな時は「意見がないのは読まれていないからで、批判があるのは読んでいただいてそれに対しての反応であり、無反応よりずっとましだ」という会の主査であった故白井啓治氏の言葉に励まされてここまで続けてこられたのだと思っています。また、逆に励ましの言葉も頂戴することも多くあり、これらは皆、原稿締切に追われながらも書き続けてきた御褒美と感謝し、何とか書き続けてきてよかったと言う思いが強く感じた瞬間です。残念ながら３年前に会の主査であった脚本家の白井啓治氏、県の獣医師である菅原茂美氏が亡くなられ、本会報も存続が危ぶまれましたが、何とか残りの会員の「本会報を残したという強い意志により継続してこられましたことを心よりうれしく思います。これからも精進を重ね天国の先生から「よ！見上げたもんだよ、屋根屋の褌！」なんて声が聞こえてくるまで続けられたらいいなと思います。まあ天国が空の上なら見上げられることは無いかも知れないけども・・・。現在、残っている会員の年令も上がってきており、さらに継続するために、今後は、毎月発行ではなく季刊（年四回）となります。毎月楽しみにしていただいている愛読者の皆様には申し訳なく存じますが、これからも引き続きご支援いただけましたら幸甚に思います。

ここに当初のこの会を始めた趣旨や経緯を書いた故白井啓治先生の文章を３点紹介させていただきたいと思います。（ここまで文：木村　進）

絵：　兼平智恵子

ふるさと風の会の基本的な思い・考え方

ふるさと風の会は、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を軸に、会員それぞれの思い・志を出来るだけ大声に会報に述べていく、語って行く会です。

ふるさと風の会発足のきっかけとなったのは、ふるさとおこし事業として２００４年６月に始まった「ふるさとルネサンス塾の民話ルネサンス講座」であるが、その講師であった脚本・演出家の白井啓治氏は、ふるさととは「恋の降る里」「物語の降る里」と表現している。

脚本家白井啓治氏が、ふるさとおこしの講師を頼まれたとき「ふるさとに物語をルネサンスできる市民プロ作家を育成し、活性化を考える」ということなら引き受けましょう、と話したことで始まったのが「民話ルネサンス講座」で、その開講の時に配られた「今、何故ふるさとルネサンスなのか」「伝承民話は未来の思い出」に書かれた内容が、今もそのまま「ふるさと風の会」における基本的な考え方となっている。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 1,500 円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男　090-4715-5527　兼平智恵子　0299-26-7178

伊東弓子　0299-26-1659　木村進　080-3381-0297

編集事務局　〒315-0014　石岡市国府 4-3-32（木村）

HP　http://www.furusato-kaze.com/

今なぜ「ふるさとルネサンス」なのか

ふるさと文化とは、その風土固有の生活形成の様式と内容である。こんな風な言い方をすると分かったようでさっぱり分からない定義になってしまいます。ふるさと文化をもっと平ッたく考えてみると「その風土に生活する知恵」ということができます。

一つの文化には一つの暮らしがあり、一つの暮らしのあるところ一つの生産があります。少し理屈っぽい言い回しになりますが、暮らしがなければ文化はないし、生産がなければ暮らしは成り立ちません。当然のことですが生産がなければ文化はありません。つまり、文化がなければ生産はないし、暮らしもないということになります

ふるさとに一つの文化が消えたということは、一つの生産がなくなり、一つの暮らしがなくなったということになります。生活が一つなくなってしまうのです。何故なら、生活する知恵を一つ失ったからです。

ふるさと文化にはいろいろな側面がありますが、それらの一つ一つにはそれぞれの伝説だとか云われ等があり、それらは伝承という形で受け継がれることによって日常生活の知恵となって活かされ暮らしを支えてきました。

ふるさとにはそれぞれ特徴的な産業が発展してきましたが、その裏を見ると、その産業にまつわる伝説や民話が必ず伝承されてあるものです。そしてそれは、その土地の人達の間に確りと認知されて口にのぼります。しかし、不思議なことにその産業の衰退にあわせて認知されていた伝説や民話が人々の口にのぼらなくなり、忘れられていきます。そして、その伝説や民話がすっかり忘れられたときには、その産業もなくなってしまいます。

ここにふるさと文化をルネサンスし、ふるさとの活性化を考えた人材の育成のための塾が開かれることとなり、その第一段階として「民話ルネサンス講座」をスタートさせることになりました。この講座は、ふるさと文化の一つである民話というところに視点を置いて、伝承を創造していく市民作家の育成を目指しています。

一つの文化を伝承していくためには、単純に埋もれた文化を掘り起こしていくだけではダメで、そこに受け継いでいこう、伝えていかなければ、という将来に対する必然性を持たせることが必要です。必然性という言葉が嫌なら有用性とか必要性といっても良いし、理由といっても構いません。何れにせよ将来にとって無意味なものであれば、伝えたり、受け継いだりされることはありません。

市民作家として伝承を創造するということは、掘り起こした文化（この講座では民話ということになりますが）に対して、伝えるに値するものがあるかを検証すると同時に、すり減ったり、時代的に不都合ができたりしている部分に対して、新たな価値を再構築して与える、ということです。新たな価値を再構築しない限り、受け継ぐ側に、受け継ぐべき必然性が認められなくなってしまいます。

今何故、ふるさと文化のルネサンスが必要なのかを考えたとき、その答えは伝承ということの意義を考えてみると納得できます。伝承の意義というのは、受け継ぐに値する価値だとか理由ということの中身になるわけですが、その中身とは、個人的な考えではありますが「未来の思い出」という風に捉え、考えています。未来の思い出とは、未来への道標だとか未来への一里塚と理解して頂ければ良いだろうと思います。

伝承が途絶えたというのは、伝承の意義である未来の思い出（未来への道標、一里塚）としての役割がなくなったからだと言えます。それは文化の火が一つ消えたということになります。先に述べたように、文化の火が一つ消えたということはその地域での生活が一つ消えたということに繋がります。そして大袈裟にいえば生産が一つなくなったとも言えます。多くの伝承文化がなくなるということは多くの生産がなくなるということですから、多くの生活がなくなることを意味します。

これはかなりこじつけの説と言えますが、「古里」と書く「ふるさと」とは、十世代にわたって口伝するもののある里のこと、という人がいます。しかし、この説はあながち笑えない説であろうと思います。

民話というのはふるさと文化の一つの側面ですが、伝承されてきた民話がなくなってしまったというのは、そこにはもう生活するための生産がなくなったことを意味し、生活する場所ではなくなったと言うことができます。これは決して大袈裟な考えではないでしょう。

伝承するふるさと文化が一つ無くなるというのは、ふるさととしての役割が一つ無くなったということになり、暮らしの歴史が一つ無くなったということになります。

歴史の里石岡に来て、最初に耳にした言葉が「歴史では飯が喰えん」でした。歴史というのは生活することによって文化として紡がれていくものですから、歴史では飯が喰えんというのは実におか

しな理屈です。歴史を紡ぐことを忘れて、歴史では飯が喰えんとは何事かと思ったものでした。民話をルネサンスするということは、昔を思い起こす、昔の文化に今一度光を与えるということではなく、自分達の生活の場であるふるさとに生活できる生産を持つことであると理解して、受講者の皆さんには確かな市民作家活動の展開を願っております。同時に、開講式にご出席頂きました方々には、あたたかいご支援が頂けたらと、お願い申しあげます。

伝承民話は未来の思い出

民話の里というと遠野を思い浮かべる人は多いでしょう。しかし、遠野には他の地域と比べて特別民話が多いというわけではありません。民話を伝承していくという文化が確りと根付いていたということでしょう。もともとは日本国中、すべての地域が民話の里でした。伝承されていた民話の数もおそらく大差のないものだったと思います。

民話とは、民衆の中から生まれ、語り伝えられてきた説話（物語）のことを言いますが、民話を細かく見てみると、神話的なものや伝説的なもの、童話やおとぎ話的なものから夜這い話のような日常の下世話な話のようなものまでたいへん幅広いものがあります。つまり、民話とは、その地域の日常生活そのものであり、地域固有の文化だといえます。

民話はある年月にわたって語り伝えられるものですが、そのライフサイクルは何代にもわたって語り継がれるものもあれば、うわさ話のようにすぐに忘れ去られてしまうものもあります。何世代にもわたって語り継がれてきた民話を伝承民話といいますが、この伝承民話はその地域の活性と密接なつながりをもって語り伝えられてきました。例えば、産業という側面に見てみますと、養老の滝に類似する伝承民話が各地にあります。そして、その伝承民話のある地には必ず銘酒が多く造られています。これは、民話と酒蔵が両輪となって研鑽をもたらし、銘酒を造りだしてきたのだということができます。

伝承民話の地域活性との関係は産業にのみとどまるものではありません。特筆する産業がなくても伝承民話の多く残す地の人々の心の豊かさは、柳田國男氏の遠野物語を読んでも納得がいくものです。

表題に「伝承民話は未来の思い出」と誌しましたが、何世紀、何世代にわたって伝承されてきた民話を読むと、そこには未来への道しるべのようなものをみることができます。そして、その道しるべをたどってみると、現在の町や村の姿のあることが分かります。

この百年を振り返ってみると、破壊の開け暮れだったといえます。当然各地に伝承されてきた民話も破壊されてしまいました。そして、民話の破壊され、伝承の途絶えた地域の衰退は目を覆いたくなるものがあります。客観的には生産のない経済を追い求めたことの当然の結果とはいえ、自身を振り返ったとき、そうした流れの片棒を担いで来た者の一人であったろう責任も大きく感じます。

民話の伝承がなくなったというのは、民話が示していた未来が過ぎてしまったことを意味します。つまり、その民話が用無しになったということです。自分の町や村に伝承する民話がなくなってしまった、ということに厳しい目を向けて考えてみますと、自分の町や村は用無しになってしまった、ということと同じ意味につながります。

民話に限らず、伝承の実際を見てみますと、もとの姿をそのままに伝えられているものは殆どありません。時代時代に改善、改良、改訂が与えられて伝承に値する未来への道しるべとしての思い出が紡ぎ込まれてきたのです。伝承というのは、そこに捧げすすめることのできる内容と、それを受け頂いても良いという内容があってこそはじめて成立するものです。だから、捧げすすめるものには、常に見直しを与え、それが未来の思い出（未来への道しるべ）に値する文化として再構築しておくことが必要なのです。

民話をルネサンスして伝承を与えるということは、その地域の復興にはなくてはならないことです。自分達のふるさとの将来を考え、後人に未来を残すためには、民話に限ったことではありませんが、そこにルネサンス活動がなければなりません。そして、伝承を与える創作者の多く登場することが地域振興と活性化には不可欠の要件といえましょう。

伝承を復興する人、伝承する人が今こそ必要とされている時だろうと思います。

《お知らせ》

本会報「ふるさと風」は次回から年4回（春夏秋冬・・・4月、7月、10月、1月）の発行となります。

今後とも応援の程宜しくお願い致します。

謹賀新年・頌春・頌歌

市川　紀行

新春とふるさと〝風〟２００号が一度に重なった。このめでたさはめったにないので、謹賀新年、頌春に合わせ、積み重ねた歴史をたたえる頌歌の言葉をおくりたい。一口に２００号というが１号１号の積み重ねで大変なご苦労である。私も毎月発行というパンフレットの経験があるがそのストレスは小さくない。できたあと溜息してるまにもう次の準備が回ってくるのだ。楽しいとめげずにやっているスタッフはすごいといわねばならない。特にこのふるさと〝風〟の場合、発起人・主宰者の白井ひろじ氏の急逝があった。残された方たちの戸惑いは大きかったにちがいない。その後１号たりとも欠くことなく今日に至った継続の努力に最大の敬意を払うものである。この姿にこそ地域文化のありよう、支えようが見えるのではないか。地域文化とはどこからか誰かが運んでくるものではない。街おこしは外のだれかがきて起こしてくれるのではなく、まずは自らが起きることから始まるのと同様だ。このことの気づきを石岡市民がどこまで大きくするのか。白井氏が以前から言っていたのは、また広げたかったのはこのことだろう。ふるさとの〝風〟にいま頌春の頌歌を歌い合わせたいと願っている。

手元にある過去の何冊かをめくれば書き手の、そして投稿者の思いや真情や「田舎っぺイ言葉」がなつかしさとともに胸を打つ。素晴らしい紙面、これが２００号続いている。メンバーに集う方たちの忍ばせる誇りとともに生きる人々への心遣いがにじむのだ。感動に感謝するしかない。

ありがとう〝風〟のみんな。そして同年代の親友、今は亡き白井ひろじよ。

私は７７歳まで手術や入院など経験がなかった。７７歳の祝い酒を仲間たちと愉快にやって翌年の春、大動脈瘤にやられ１０時間以上の心臓手術をうけた。その後の感染症も危うく乗り越え母にもらった丈夫な体に感謝しきりであったが、八十路で腎不全が見つかり食事療法、入退院を繰り返して結局は人工透析になった。

現在地元美浦の病院の透析センターに通っている。週３回、各４時間。きれいなセンターで送迎してくれる。今ではすっかり透析生活に慣れてきた。看護師さんたちも親切だ。長旅も外国旅行も無理だけれど　ものがおいしく食べられるので喜んでいる。成田の病院を退院するとき若い栄養士さんがこっそり伝えてくれた、「市川さん、おいしいもの食べなさいよ。量は控えめにね。そのための透析と思えばいいわ。」私には天使の声に聞こえた。「あれはダメ、これはたんぱくだからダメ。あれは塩分と、リン・・・」。腎臓食の数々。私は食欲もなくし生気もなくし顔は病人そのもの。高いものじゃなくて、人間にとって味のある食べ物が欲しい。ステーキもハンバーグも、寿司も天ぷらも、ぎょうざもチャーハンも。透析のある日はランチを病院でとり、時に妻と外食する。お酒もチョコで少し。私は元気になってきた。生きてる感じになってきた。量は7掛けに抑えている。「あの栄養士さん、ドクターがそばにいたらあんなこと言って励ましてくれたかな」と国立の医大生になっている孫二人に聞いたら「いわないよ」と口をそろえた。

食べられる喜び、食は元気の元とわが天使を思い浮かべて今後の寿命を頑張りたい。元気でいれば「風」も読み続けられるだろう。いっそうのご発展と皆様のご健勝を祈るものである。

（劇団　宙の会主宰、　元美浦村長）

神の使い手

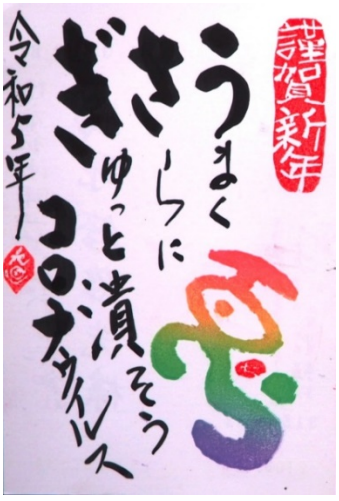
オカリナアートＪＯＹ　野口喜広

「ピーヒャララー・・・　テケテンテンドンドン・・・　カンカンチキチキ、カンカンチキチキ、カンカンスカカンカン・・・」　今年元旦から畑違いのお仕事＝獅子舞のお囃子の依頼をいただきました。

獅子舞とは、日本古来より受け継がれる伝統芸能であり、御神事です。獅子は大自然の氣を受けた神の使いで、お囃子の音魂は場を清める役割があります。参拝者の頭や空中を噛む仕草は、お祓いの意味があります。

昨年の十二月中頃、私の携帯に一本の連絡が入りました。その声は大変懐かしく甲高い明るい声でした。彼女は横笛奏者で、かれこれ二十五年来の付き合いの音楽仲間です。話の内容は、お正月に東京とつくばのホテルで獅子舞のショーがあるので、お囃子の代役として『鉦(かね)』を叩いてくれないか?ということでした。あまりにも急な話で面を食らいましたが、好奇心の塊の私は二つ返事で受けることにしました。しかし、不安はぬぐえません。ランチショーやディナーショーは有料です。一応私もプロの端くれ、その辺の厳しさはわかっているつもりです。ましてや日本の伝統芸能です。いつものような趣味のパーカッション

二〇〇号記念　年の初めに　　兼平智恵子



皆様におかれましてはお健やかに幸多き新春をお迎えの事とお慶び申し上げます。

今年こそマスクのない、微笑みに会える日々が戻りますように……

兎は穏やかで温厚な性質であることから家内安全を示すと言う。ウクライナの人々に一日でも早い平穏な日々が戻りますように……

一国の主の判断がどれだけの大切な命を奪ったのか、どれだけの建造物や大地を粗末に破壊したのか、この戦いで全世界の人々が命の大切さ、大切な地球を守り続けることの大事を学んだ事でしょう。

また、兎は跳ねる特徴から、景気の好転回復が期待され、縁起のいい年として、知られている。

世界中に、はびこるコロナウイルスや一国の主の欲望からの戦いが早急に好転回復しますように切に切に願っています。

東京で活躍していた脚本・演出家の白井啓治さんは奥様のご都合で石岡に移られました。

降る里　　白井啓治

のように即興というわけにもいきません。本番までの二週間、年末の大掃除もできぬまま自主特訓を重ね当日を迎えました。

時は令和五年元旦、場所は東京タワーのふもと、芝公園内にある某ホテル、そして翌日はつくば駅近くの某ホテルにて、にわか神の使い手として明るくにぎやかに演じてまいりました。ステージ場では三種のリズムパターン、「早屋台」「早鎌倉」「投げ合い」で横笛、太鼓、鉦が三位一体となり何とかそつなくこなすことができました。その反面、ステージを降りお客様の各テーブルをお獅子さんを誘導しながら回る（練り歩き）ことは大変でした。

「あけましておめでとうございます」「家内安全、無病息災、今年も益々幸せな年でありますように」「お獅子さんに頭を噛んでもらってください」「頭が良くなり、風邪をひかない強い子に育ちます」などと口上を述べながら、八人掛け二十七テーブルをもれなく回ることがいかに神経を使うことか、お獅子さんは口のほんの少しの隙間から覗けるだけで視野が狭いのです。主にホテルのアテンドの指示でテーブルを回るのですが、それを見誤ると私はパニック寸前、お獅子さんは勝手に動き、制御不能、獅子舞ですが私は『てんてこ舞い』、あとは獅子奮迅で踏ん張り、事故もなく全員の頭を噛んで回ることができました。めでたしめでたし！

そんなこんなで何かと慌ただしいお正月でしたが、少し落ち着いた五日の日、先月から痛みのあった左肘の治療のため近くの整形外科に行って来ました。そこで何と奇跡的なことが起きました。診察室の扉の左側、私の座席の真正面に正月飾りがありました。縦二十㎝横十㎝の薄い板に小さな獅子頭が付いており、その板に筆字で「富貴　天上に在り」と書かれてありました。『富貴』は四年前に他界した私の母の名前です。その時目頭が熱くなり、とても感慨深いものがありました。また『富貴』の意味からも今年は良い年になりそうな予感がします。

最後になりましたが、皆様方にも『富貴』が訪れますよう、「カンカンチキチキ・・・」心よりお祈り申し上げます。

にわか神の使い手より

☆イベントのお知らせ☆

九月二十八日（木）～十月九日（月・祝）石岡市（旧八郷）こんこんギャラリーにて「オカリナ＆土笛の個展」を行う予定です。

一日暮らせば、そこはふるさと。
ふる里とは、「心の降る里」。
心の降る里には、恋が降り、物語が降る

白井啓治さんは、ふる里とは「物語の降る里」と定義づけ、「ふるさとに物語をルネサンスできる市民プロ作家を育成し、活性化を考える」と言う「民話ルネサンス講座」の講師を引受け、
２００４年（Ｈ一六）６月スタート。
続いて９月に「劇団しゅわーど俳優塾がスタート」。
２００６年（Ｈ一八）には、それぞれの講座、塾の修了生達によって、白井講師の教え『画家であれ、俳優であれ作文力のない者は達成が難しい、今日のうれしかった事、楽しかった事を拾って言葉におとしなさい』『歴史に関しては十分な検証が必要である』
のもと、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」を基軸とした会報「ふるさとルネサンス」の発行となりました

２００７年３月には会報誌名が現在の「ふるさと風」と改名。
講座の修了生、俳優塾修了生、それぞれ数十人の中で、現在まで踏ん張っていた人は、打田さん、伊東さん、兼平、俳優塾では小林さん（手話舞）となりました。その後も会報誌への会員、故菅原さん、障害に苦しみながら心開いて語ってくれた堀江さん、文章書きの大好きな若い、にわやまさんもいました。その他沢山寄稿して頂いた方々がいらしゃいました。
そして、故白井先生の後をしっかりと支えてくれています木村さん、ギター文化館を勇退された木下さん、ここのところ体調不良で休んでいる菊地さん、土浦からの大輪さんの、みなさんと
「歴史の里石岡」の活性化に少しでもお役に立つように、ご愛読頂いてる皆さんの為に、自分磨きの為に無理なく発行し続けて行きたい思っております。

思い半ばで逝ってしまった白井先生、さぞかし無念だったと思います。元気だったころ、風のことば絵同好会の教室にいらして、日々のうれしかった事、楽しかった事を一行文に落としなさいと力説。

それから、歴史の里石岡に来て、最初に耳にした言葉が「歴史では飯が喰えん」だった。歴史というのは生活することによって文化として紡がれていくもので、歴史では飯が喰えんというのは実におかしな理屈だ。歴史を紡ぐことを忘れて、歴史では飯が喰えんとは何事かと思ったものだ！と強く怒っていました。

○　天に向かって
“先生！原稿締め切りですよ！”叫べど…
智恵子

我が人生の回想12

木下明男

１９８０～９０年代労音のトップへ・・・

労音活動に参加してから１６年目・・・。この間、会社（ニコン）での組合分裂を経て、労音サークルへの参加。そして地域活動への参加、地域の中心活動家へ・・・。生涯をかけた生き方として労音運動を選択、知り合った女性と結婚。さらに、地域活動から中央の役員へと進み、やがて全国の労音活動に参加。それらの活動が評価され、１９８３年東京労音のトップ（委員長）に推薦される。労音の組織は基本任意団体で法人格は持っていない。従って組織の運営は各活動組織（地域や職場）の代表によって行われている。（委員会や運営委員会）日常的な業務は、運営委員会によって討議された方針を、専従者（事務局員）が行う。東京労音は１９６０年代の最盛期には、事務局員（臨時雇用も含めて）80名を超すほどだった。（その時、１ヶ月の会員数は20万人近くに達

していた）

１９６０年代中頃から労音への排斥が激しくなり、大企業（経団連）や創価学会により「音協」・「民音」等の類似団体が作られ、会社や地域社会から、労音のサークルや会員が排斥されるようになってきた。会員数は月毎に減り始め、60年代の終わり頃には１０万人を大きく割れ、事務局員を大きく減らさなくてはならなかった。１９７０年の初頭に、信濃町にあった事務所から、水道橋に新設された労音会館（８階建てのビル）に移転をした。長年に渡って積み立てた（会費に10円を上乗せ）会員の資金で建設。国と係争していた入場税の未払は、和解により事務局（土地）を沖縄県に売却した費用（３億円余）を当て、新会館の差し押さえを免れる。減員した事務局員は、新しくできた会館運営に当てた。社会情勢の変化もあり、労音等の鑑賞組織の会員は減り続け、事務局員もさらに減り続ける。１９８０年代の半ば、中央一局の体制から各地域を中心に据える体制（地域労音の新生）を打ち出し、運営委員会の討議に掛ける。１９７０年に建設された労音会館も20年近くなると経年劣化が激しく維持費が嵩んでくる。地域労音の方針と合わせ、中央一局体制脱却も鑑み労音会館売却（２５０弱坪の土地）を決める。任意団体はその基本財産売却には非課税であると聞いたのも売却の一因であった。

売却で得た資金を基に、地域労音の中心になるセンターを構築（本部を新大久保、城北の拠点に十条、都心部のセンターにお茶の水、東部センターを北千住、南部センターを新蒲田、三多摩地域に府中センター、東葛センターを松戸）巨額な売却資金（72億円）の半分を水道橋の労音会館に変わる、各地域のセンター建設に導入、残りの資金を貯蓄し利子（この頃バブル期で高額預金者へ５％を超える利子が生じていた）を日常の運営費に充てる予定だった。この基金を守るため、財団設立（財団全国労音会館）の方向で動いていた。労音そのものが法人格を得るのが難しく、実質的に支配を持てる形で財団建設を模索。これ等の一策として、労音と関係の深かった音楽評論家Ｈ氏の協力を得て、マヌエル・カーノ記念音楽事業団（後に国際ギター文化交流協会＝ＩＣＧ）を設立し本部として茨城県石岡にギターの会館を建てた。此の会館を音楽界やギター界に広く認知させようとイスパニダ音楽祭（スペインがアメリカを発見して５００年）を企画した。しかし、企画（外部委託）は不十分な準備で失敗に終わり、その責任を取り理事長を辞任することになった。また諸々の活動は、労音内部での十分な理解が得られずＩＣＧは実質活動中止になった。

30年近く、生涯の生き方として続けてきた労音活動。１９９４年委員長を辞任しこれからの活動をどうするか悩む。職場（組合）からは、労音の任務に区切りがついたのだから、これからは会社内での活動に力を貸して欲しい（組合の委員長）と要請される。労音活動を更に進めるため、職を辞して労音の専従としての道を選ぶ、39年務めたニコンを退社。南部労音の事務局としての活動が始まる、地域代表として中央の運営委員として数年活動するが、松戸労音からの誘いもあり将来のギター館勤務の足掛かりとして、松戸（東葛労音）の事務局として働く。数年後、ギター文化館で労音活動を進める立場で代表に就任。

地域に眠る埋もれた歴史（88）　木村　進

【民族芸能と祭り】（２）木之地のみろく

明治35年に石岡のおまつりの年番制度ができた時、当時の地元の役員たちが１年かけて、この石岡のおまつりを作り上げました。そして十六の町がこの制度に加わりました。

しかし、所帯が小さいということで「木之地町」が昭和27年に辞退し（昭和12年の年番が最後）、現在15の旧町内が年番を順にまわっています。木之地町は脱退しましたが、ここの愛宕神社に伝わる「木之地のみろく」は大変興味深いものです。

昔、中町に「天王社」という神社があり、ここで毎年６月14日に行なわれていた「祇園祭」が西暦１７００年代半ば頃から行なわれていたといいます。これが今の祭りの原型となっています。

そして、この「木之地のみろく」も５番目に登場します。１番は今の祭りと同じく「富田のささら」です。この人形を復元して、おまつりの時に、木の地の通りに面した町内の会所にて披露されました。その時に配布された資料から紹介します。

《木之地のみろくについて》

「みろく」とは、弥勒菩薩である。

元禄15年（1702）に作られたといわれる木之地のみろくが、どのような姿をしたものかは明らかではない。江戸時代の祭事を記録した文書には祭礼

の出し物として出されていたという。
祭礼参加の記録では、嘉永４年（1851）が最後と思われていたが、地元の人が復活を願い、それから83年後の昭和９年に竹原の弥勒を参考にして総社宮の祭礼（年番守木町）に出し物として復活させた。

それは、愛宕神社に古い一、二体の人形があり、破損を修理して数体の人形を作り、また数体を竹原よりお借りして、祭りに出したという。
しかし木之地町は所帯が小さく昭和12年を最後に祭りの年番より脱退しました。
何とか「木之地のみろく」を復活させようと平成16年の祭礼に合わせて木之地町の会所にみろく人形を飾りました。
飾られているみろくの人形は、
「爺」（前口上）「若侍」（受口上）「姫」（舞）で口上と笛や太鼓で踊りがついていたようです。
・大野のみろく・・・青（鹿島様）、赤（香取様）、黄（春日様）
・元町のみろく・・・赤（鹿島様）、白（住吉様）、青（春日様）
・竹原のみろく・・・青・黄・赤・白・黒の男人形に、白の女人形
とのこと。
この「木之地のみろく」人形は竹原のものを参考に復活されたものと思われます。
歴史的には県内に６か所しか残されていない「みろく」人形も興味がありますが、あまり詳細が不明なところがあり、このようなところももう少し検証して記録として残してほしいものです。
日本全国には変わった祭りや風習が残されています。この石岡地方周辺でも、各所で伝えられ守られてきたこれらの祭りや風習があり、全て伝統芸能というように考えてよいと思います。

追い風はあたたかく

伊東弓子

時々吹かすことがある親の風、後味が悪い日々が少しの間残っている。それを解消してくれるような出来事が次々にあった。それは私が生まれて，育って生活してきた故郷へつながる長い長い時間と、広い広い世界を改めて知らせてくれた。今続けられている玉里御留川の活動へも最後まで頑張る力を与えてくれた。
一つは、―古代アジアを生きた、ある王国の歴史―加耶　韓国文化財の展示会だった。三年前、コロナ流行のあおりを受けて断念せざるを得なかったが秋、開催されることになった。一人でもバスや電車にのってでも行こうと心に決めていた。学問的に見ようなどという気持ではなく、ごくごく親しい親戚に会えるような想いで待っていた。遠い朝鮮の地で亡くなった姉や兄に会えるような想いで胸が高鳴り、喜びが日に日に募っていった。そこに娘二人からの優しい声がかかり、出かけることになったことの喜びは大きかった。
女化稲荷の立札を左に見て、稲刈りのすんだ田を走り、どんどん小さくなっていく筑波の峰を背にして、利根川を渡って布佐の町に入った。夫が幼児期を過ごした所で、夫からも姑（はは）からもやんちゃ時代の出来事をどれ程聞いたことか。一つ一つが懐かしい所だった。布鎌は祖母の妹が嫁いだ寺がある。若い頃訪ねたことがあるが元気なうちに一度行ってみたい。布川事件のあった所はどこだろうと思いながらいるうちに地形の変わった所を進んでいった。この三カ所の地名に“布”があるが、利根川沿いの地名か何か共通するものがあるだろうか。山合いに湿地帯が見えている。印旛沼一帯だという。遥かに離れているので身近には感じられないが想像してみた。姑の若い時、学校から女の先生方が研修に出かけ時、天候の不順によって舟が遭難にあったそうだ。何舟かの舟と先生方は沼で亡くなった大惨事だったという話しだ。霞ヶ浦でも起きたことは数知れぬほどだったと聞いたことがある。佐倉にある国立博物館は、山の高い一帯にある広い場所だった。半日かけてゆっくり見て歩いた。古代文化・古代人とどの国でも発掘された品々が展示され、賞賛されるが、

自然の中から見つけ出す能力、それらを細工していく技術をどう伝えていったのか、いつも不思議に思い、身につける人は力のある者と常に決まって共通している。これも人間の歴史なのだ。現代と比べていた。常設“日本の歴史”も時代を分けて大がかりなものだった。加耶の展示と同時代のものを比べてみたりした。戦いに負けた人々が中国、朝鮮半島を駆け抜けて海を渡り、日本列島に流れ込んだ人達は日本人の大元になったのだろうか。大宰府跡に立って和子さん、きみさんと西の海を眺めた時もたくさんの人々の往生を思った日があった。蒙古の襲来の時もどんなだったろうかと思い、昔を偲んでみた日もあった。父や母が平城の寺へ学校の勤めにと、この海を渡ったことだろう。私も幼い日に何度か越えたろう海をどんな思いでついていったのだろうか。戦争が終わり、多くの引き揚げ者がこの海を渡って帰ってきたあの日々、喜びも苦しみも複雑だったことだろう。今しみじみ考える。感動したのは沢山の思いを私の胸におこさせてくれた。とてもとても幸せな一日だった。あと一回や二回でも見たい気持ちだったが、これも欲だろうか。後ろ髪を引かれる思いで帰路についた。

師走の訪れが近い頃、再び千葉を訪ねる機会があった。利根川沿い（茨城県外）を暫く走った。印旛沼、霞ケ浦がそうであったように、利根川も以前は暴れに暴れたことだろう。など考えながらいる目に入った物、今秋話題になった議員のポスターだった。夕陽は農村地帯を包み、草紅葉は一段と鮮やかだった。移り変わる景色は県境を過ぎても変わらないが、一つ一つが新鮮で旅に出た楽しさなのだろうか。宿と言いたい気分で今風の建物の中に入った。海がすぐ目の前に見える。波の音も心地よく耳に入ってくる。時間の過ぎるのも忘れて話しが弾んだ。若い人の考え、娘の気持、仕事を通じての社会的に人を見る力を学んだり、私なんかよりずっと大人に見えて頼もしかった。何回かテラスに出ていたが、雲の多いせいか、星は見えないとがっかりしていた星の好きな娘が期待していた所だった筈だ。右の方の砂浜は“月の砂漠”のモデルの所。自然に少女時代の歌詞を口ずさんでいた。黒潮と親潮はどの辺で交流するのかなんて思いながらいるうちに寝込んでいた。宿の客は老人の姿が多い。みなさん人生の疲れを癒してもらえたことだろう。と、自分の気持と照らし合わせてみていた。

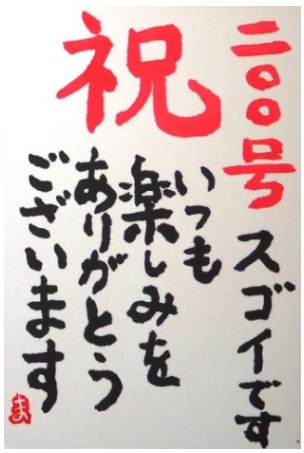
銚子の燈台をずっと下の波打ち際に見て、小高い山の頂上から四方を見た。利根川の河口から西に流れは大きく、その先に茨城県が見えた。大半が海であった中でこの丘だけが島だったという。古代人が外海を越えてこの辺りから内海に入ったのだろうかと、考えると夢が大きくなる。以前から住んでいた地元の民の平和な暮らしを塗り替えざるを得なかったであろう当時が偲ばれる。三社の威厳さも埋め立てられた土地も支配していった人々の力によるものだろう。つくづく思い大きな溜息も出る。内海を進めば豊かな海と陸が続き、そこに古墳が出来、高浜・府中へと文化も花開いたのかと自慢したい反面、随分壊したものも多い。海を塗り潰し町をつくり、御留川、四十八津に名を残した漁をする場はなくなった。私らの住む霞ヶ浦沿岸は堤防で仕切られた。でも朝鮮半島から銚子の海、そして内海へつながっている。高浜から小川へと…そして御留川では小川から江戸へとつながって行く。丘を降りて銚子の町に入った。

懐かしい「チンチン」電車の踏切に差し掛かると銚子電鉄の頑張りを思い出した。赤字路線で頑張っているのもさることながら、大原幽学の話しだった。子育ての頃、家庭教育学級の時間だったと思うが、「農村づくり・子供の教育」の話しだった。田の畔づくりか、畑の農道づくりか忘れたが、子供達が毎日走り堅めた道が素晴らしかったと聞いた。今もしっかり利用されている道だという。あれから四十四、五年経った。今はどうなっているだろう。行ってみたいなあ！　という所が増えた。欲が次々湧いてくる婆さんで、周囲に心配かけかねない。大きな声では言えない。

こうして書いていてもふう―っと秋のあの日とあの日の事を思い出し楽しかった、本当に幸せを感じた出来ごとだった。

老いと共に染みついた性格はなおらないのに押し通す。事あるごとに若い人の知恵で修正してもらおう。遠い遠い中国から朝鮮半島からの長い時間と広い世界にふれて、娘達の優しさに包まれて素直な自分になって年を越すことが出来た幸せでいっぱいです。

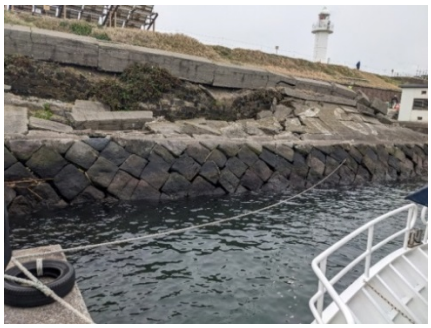
せめて利根川をのぼって行ってみたい。



（まさこ）

第二海堡

小林幸枝



皆さんは「海堡（かいほう）」と言う言葉をご存知ですか？海堡は海の上に人工的に作られた要塞のことで、敵が攻めてきた場合に備え砲台などが設置された人口の島のことです。東京湾には３つの海堡が建設され、第一海堡は千葉県の富津岬に近い浅瀬に、また第二海堡は第一海堡の西側2.5ｋｍほどの沖合いの水深が８～12ｍ位の所に。第三海堡は第二海堡より更に南の東京湾の真ん中辺りの深い場所に建設されました。この第三海堡は海深が深く、波の影響や関東大震災で崩れ、戦後は海難事故もたびたび起こり近年撤去されました。一方第二海堡は、建設には明治22年～大正３年までの約25年間がかかり、戦前は陸軍、海軍が東京湾防衛の要としてこの海堡に駐留していましたが、敗戦により連合軍に接収され、日本に返還された後も軍事遺構という特性から長い間、関係者以外の立ち入りが禁止され、その姿は秘密のベールに包まれていました。それが、２０１９年の令和への改元と同時に旅行代理店主催のツアーで一般旅客の上陸が解禁となったのです。

第二海堡は岩礁などの砂地の海底にゼロから築かれ、はじめに防波堤を、次に船を停泊させるための桟橋を造り、そのあと海底に土台となる石を投入しました。この防波堤は日本初のものと言われています。完成当時はもっと長く高さもあったのですが、関東大震災の影響で多くの部分が海中に崩落してしまったそうです。

ツアーで上陸する北側桟橋の周辺には、ひし型の大きな石が積まれています。これは間知石と言い、建造当時の護岸です。この石組み技術には、日本の築城の技術が使われており、大きな間知石の間に小さい石を詰め、さらにモルタルで固めていて非常に頑丈な造りになっています。このため、波や巨大台風などにも耐え抜いてきました。

そして、戦後に、この技術はアメリカへも情報提供されたそうです。灯台の北側あたりからは、どうやって積んであるのかをよく見ることができます。

東京湾の真ん中にあるために船でしか行くことのできない「第二海堡灯台」は全国の灯台マニアにとっての聖地でした。初代は第二海堡完成まもない明治期に灯台ではなく、夜間航行の目印として灯竿というごくシンプルな航路標識として造られましたが、２代目から灯台となり、３代目に今の場所に移ったそうです。現在の灯台は４代目で、昭和58年に建て替えられ、高さ12ｍ、光の到達距離は約24 Kmあり、東京湾アクアラインや海ほたるからもその光を見ることができます。

第二海堡の中央に位置する高台は、27センチカノン砲塔砲台の跡があります。この上に砲身の方向を変えることができる砲台が置かれており、地下部分には弾薬庫や作業場がありました。砲塔の上部に建設されたレンガ構造物は防空指揮所と言い、この上に立って見張りをしたり、軍全体の指揮をとっていたといわれています。

第二海堡の西の端に位置する、通称「西の広場」は最初はカノン砲を設置する予定だったようですが、途中で計画変更になり、のちに探照灯や水中音響訓

練所が置かれていたようです。近年の発堀調査で、地下部分は弾薬庫だったことがわかりました。分厚いレンガ構造の壁に湿気や塩害を防ぐためのコンクリートやアスファルトが施され、頑丈な造りになっています。

第二海堡で見られるレンガには桜や文字などの刻印が押されているものがあります。明治期のレンガにはこのように特定の印が押されたものがあり、この印はレンガの製造所を表しているそうです。

明治期には東京駅と横浜の赤レンガ倉庫などの有名なレンガ建築がたくさん造られましたが、刻印はレンガの一番広い面に押されているので、通常は見ることができません。しかし、第二海堡では建物が崩れてしまったために刻印入りレンガを数多く見ることができるのです。

桟橋から見られるのが、90 mあまりにわたってのびるレンガの塀で、軍の物質を通いたり、兵士が暮らすための防空壕のような役割の構造物で「掩蔽壕」というそうです。入り口がアーチ状になっており、現在は安全対策のため入ることはできませんが中は広い空間が広がっています。

風と共に　《理》（30）　大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「一年を振り返って」

皆さんは、昨年はどの様な年でしたか？

私は、公私共に充実した一年だったと思います。仕事でも躍進の年と言えました、全てが上手く行くわけでは有りませんが、自分の思い描く未来への足掛かりになったと言って過言ではありません。環境が変わればやり方も気持ちの持ち方も変わっていきます。

良い所も悪い所も両方ありますが、良い所の数が勝っていたなら尚更の事自然と気分も上がっていきます。

サラリーマンですから、しがらみと上手く付き合って行かなければなりませんが、そんな中でも昨年は、職場活性化優良として、管内では３つの内の１つに選ばれ、インタビューなんかも受ける事になりました。

質問の中で、取り組んだ施策は何ですかと投げかけられ、細かい事はさて置き、１人１人と時間をつくって向き合う事だと、こう答えました。

インタビュアーは、会社が契約しているコンサルタント会社の社員でしたが、やはりその道のプロだなと先ずは感じました。

漠然とした質問ながらもその中身は、次から次へと話し易いサポートがあり、

初めてのインタビューで緊張して痛み事もありましたが、大分気持ちが楽に話す事が出来ました。

これについては、最終的に私を含めた優良者への複数人のインタビューをもとに、全社的に周知して行くのだとか、その中でも私とのやりとりは他と異なっていたのか、

ここまでしていただいていると、おおよそ産業医の役割にもなっているらしく、中々これを広めるのは専門の知識から勉強しないとなりませんね、と、私自身もそんなに大げさな事をしていたつもりはありませんが、社員の為になっていたならそれで良かったと、そう感じる事が出来ました。

明日の事は分からない、

本当にそう思います。

私の職場で同期として働いていた戦友とも呼べる、そんな方が突然左顔面麻痺という事で、急遽お休みを取りたいとの連絡が入りました。

勿論、健康第一ですから、心配しながらも50歳前後という年齢もあって、すぐに良くなるだろうとたかを括っていましたが、一進一退の闘病生活となってしまい、見ているこちらが辛くなる様な事態が発生してしまいました。

ベテランとして、指導する側の立場の方ですから、会社としての損失も勿論あるわけですが、

幸いの所、寝たきりだとか要介護状態とまでは行っていませんので、今後もサポートできる部分はサポートしながら、１日でも早い完全復帰を願うばかりです。

仕事の話が続いてしまいましたが、世の中全ての事柄に於いて、人と人との繋がり、

特に良縁と言うものは、もしも出会えたとしたなら、それはどんな事をしてでも、離れては離してはいけないものだと、実感するばかりです。
ですが、中々その本質には気が付かない事が多様にある為、親・兄弟・姉妹・親戚・友達・職場の関係者等々、自分にとって成長する事が出来る出会いを経験したなら、目の前の現実に酔いしれる事無く、足下（その支えの部分）にはちゃんと目を向け、感謝の気持ちを伝える、或いは行動や贈り物等できちんと形にしなければなりません。

心の中だけで感じていても相手には正確に伝わらないからです。

近しい親しい間柄ほど、疎かにしてしまいがちですが、だからこそしっかりと先に行動に移すべきです。

日々、テレビやニュースでは心無い事件が多発しています。
皆さんの身近で実際に経験している方もいるかもしれません、世の中の頭の良い人達は、この様な現象を止める事は出来ないのでしょうか。
専門に研究している方はいるのでしょうか。
他人任せな発言ではありますが、その様な情報を手に入れる事が出来て、尚且つそれを生業としている方がいるなら、何とか少しでも心無い犯罪が減少して行く様に、尽力いただきたいと切に願います。

先程の話に戻りますが、
明日の事は分からない。
普通に明日が続くものだと、何の疑いもなく日々を送っていますが、普通な毎日を過ごせる事こそ、何気ない日々の幸せですよね、だからこそ明日のために、今のため、未来のために今日できる事は今日やりましょう。
面倒で後回しにしてしまいたいものほど、今この瞬間に取り掛かりましょう。

人は後悔をやり過ごす毎日を送っていると、私はそう思っています。
あの時やっておけば良かった、やっておかないかったからこうなった。
分かっている、知っているのに、まいっかと、やり過ごしているんです。

その小さい積み重ねがいつしか自分自身の生き方にまで干渉される羽目になる訳ですよ。
何でもそうなんです、始まりはほんの小さな出来事なんです。

小さい内に芽を摘みましょうよ、簡単にできる内に済ませてしまいましょうよ、結果、明日がもっと楽しくなるんです。
楽しくならなかったとしても、悲しくなる事はないんです。

何で自分がこんな事しなきゃならないんだと、マイナスにネガティブに考えるのではなく、
この辛いと感じている事は、行動している事で自分にとって何らかのプラスになってるんだ、自分のプラスにならなかったとしても、自分にとって大切な誰かの役に立ってるんだ。
そんな風にポジティブに考えて実践してる人の方が、毎日の面倒事も、面倒ではない方向に捉えているかもしれませんよね、
皆さんはどちらを選びますか？

私の知らない・経験した事のない、全ての事に当てはめられるとは限りませんが、大抵の事は表裏一体ですから、ポジティブに変換出来るのではないかとそう思います。

歳を重ねる毎に、1年の流れが早くなっている様に感じますが、
やるべき事をやって、自分では気がつかない内に充実した日々を、送っているからなのかもしれません。

お休みの日って時間経つの早いですよね、夕方になるともう明日かって。

楽しい充実した時間は、経つのが早いんですよね、その分しっかりとその日に重要な事をしてるんだと思います。

勿論、お正月から、寝正月だったよーって方も、身体が休息を求めているなら、ゆーっくりと過ごす事も重要な事の一つですから、休みの日だからあれしなくちゃこれしなくちゃって、休前日にそんな事を考えるだけでも疲れてしまいますよ。
計画的に実施すべき事は、今日実施する先延ばしにしない、だけど、身体が悲鳴をあげているサインがあるなら、いつもいつもでは仕方ありません

が、そんな日があっても良いんです。

10代の学生の頃から、今は世の中がかなり変わってしまいましたし、自分の考えや物の見方や好物も変わって来ました、その刹那を楽しめるといった所は変わりませんが、若い頃から比べると、背負うものが段々と大きくなり、それに伴って生活スタイルや時間の使い方が、全く違う世界で生きていると、このところ特に感じています。

それが良い事なのかどうかは、疑問に思う事もありますが、自分自身と周りの大切な人達が健康で、普通な毎日に小さな幸せを探して、面倒な事をポジティブに変換して、笑顔で過ごせる毎日を守って行く事が、私自身にとってとても重要な事です。

今苦労している方、悲しみに暮れている方、どうしようようもないと悲観している方、そんな方々にもどうか少しばかりの幸せが訪れます様に、些細なキッカケで人生逆転する事もありますし、ポジティブに考えられない事も多々あるかと思いますが、いつか嵐はおさまります。
晴れの日もきっと来ますから、
それを信じなきゃ、明るい未来を想像しなかったら、自分の手元には届きませんよ、強く願い行動し引き寄せるんです。

様々な皆様にとって、良い一年となりますよう、お祈りいたします。

小さな幸せが連鎖します様に。

下士官の手記　　燕石（えんせき）

南方に転進　　１６

×月×日
突然の命令で、南方に派遣となった。
部下たちに別れを告げて、港に向かう。
アメリカ軍との間では、太平洋上の島々の奪い合いの激戦が続いていた。前進基地に、通信所を開設してほしいという。

×月×日
大型輸送船の上で、することもなく、時には相撲大会が行われた。
船に乗るのは慣れていたから船酔いもない。

×月×日
どんどん南下する。
日ごとに暑くなる。

×月×日。
輸送船に揺られて、Ｊ島に着いた。ここはサンゴ礁の環礁の島だ。
途中敵の潜水艦の攻撃で、半数の船が沈んだ。兵員や物資を積んだ船は、一発の魚雷であっけなく沈んでしまう。海に投げ出されたものを救助する余裕もない。

×月×日。
寒い大陸から一転、暑い南方の島に来た。島には二カ所の港と、三カ所の飛行場がある．いくつかの群島の一番大きい島だ。ここは海軍の管轄である。
ここらには一個師団以上の陸軍が展開している。いずれも大陸から引き抜かれた部隊である。いずれも、輸送途中で、半分くらいが水没して、兵器も装備もろくにない。
島には邦人がいて、あとは現地人もいる。南方貿易の拠点の一つだった。

×月×日。
海軍の通信隊と協力して、無線所を開設する。
この通信隊の司令官となる。
ここには海軍の情報将校がいた。学徒上がりの若い中尉だが、非常に優秀だった。
どうも日本軍の暗号はアメリカ軍に解読されてしまったらしい。いっぽう、アメリカ軍の暗号はこの優秀な将校でもどうしても解けないという。
暇があると、この将校と話をした。
大陸での話を面白がって聞いていた。

×月×日
連日空襲がある。
すさまじい量の爆弾が降ってくる。防空壕に避難して耐えるしかない。連日死傷者が出る。
生えていた椰子の木は、一本も残っていない。
高射砲を撃つが、弾の届かない高度からなので一発も当らない。

×月×日
部下の一部が到着する。

×月×日
通信所を本格的に稼働する。日本の通信機は性

能が悪い。大陸で鹵獲したアメリカの物は、性能がいい。無反動砲と言い、通信機と言いアメリカには勝てそうもない。トラックだって馬力が違う。

×月×日

この通信隊の司令官となる。味方の航空機は、アメリカ軍の新型機に圧倒されているようだ。特攻も始まった。次々と別れの無電を売って消えてゆく。

山本五十六長官も戦死した。

×月×日

だしぬけに、終戦の無電が入る。

高級将校はいつの間にか姿を消している。

くだんの情報将校は、極東裁判の日本側弁護人となったという。

復員　17　帰省列車

×月×日。

敗戦から数か月がたっている。

将校鞄と、大きな背嚢とともに、深夜のS港に着いた。軍服も軍靴もボロボロである。上級司令部があるはずなのだが、尋ねても所在が知れない。

×月×日

南の島から辛うじて脱出した。

×月×日

早朝、S駅から列車に乗る。以前ならば将校専用の客車があったが、今はそんなものはない。ぎゅうぎゅうに詰め込まれ、身動きすら儘ならない。故郷までは長旅だ。心なしか周りの視線も、将校に対しては冷たいように感じる。

無理もない。コテンパンに負けたのだから。

×月×日

故郷の村も、軍需工場が近くにあったために繰り返し空襲を受けて、家族は全滅していた。天涯孤独となってしまった。

×月×日

幾つかの大きな駅を過ぎると、ようやく席に座ることができた。遅い昼飯を取る。握り飯に周囲の目が集まる。食糧難が深刻だ。

×月×日

最初の停車駅で、下車して街中を歩いた。部下の一人の遺品を届けるためである。

×月×日

一面の焼野原。空襲によって壊滅的な被害を受けたらしい。人影もまばらである。掘立小屋のようなものがそちこちにある。

×月×日

実家の場所をたずね当てて行って見た。その集落は、少し前に流行病があったらしく、住民もほとんどいなかった。敗戦によって、十分な治療をする余裕もなく、いわば見捨てられてしまったのだろう。

×月×日

なんとか親類筋をたずね当てて、遺品を渡した。迷惑顔ではあったがさすがに遺品の受け取りは拒まなかった。

×月×日。

途中駅で、運行が打ち切りとなり、始発列車まで待たなければならない。生憎宿はどこも満員であった。大陸で極寒を経験していたから、さほど寒くはなかったから、野宿でもしようと、町はずれまで歩いた。

日も暮れてきたので、草むらに腰をおろし軍隊毛布を出す。携帯テントを組み立てる。枯草を集めて火をつけ、湯を沸かす。手持ちの缶詰と携帯口糧の食事だ。気が付くと、近くにつぎはぎの服を着た女がいてじっとこちらを見ている。

手招きして、「よかったら、一緒に食べよう。」というとよほど腹が減っていたのだろう、黙ってむさぼるように食べている。空腹には勝てないのだ。テントの中に招き入れる。

目覚めると傍らに女はいない。寝ている間に出て行ったのだろう。のろのろと起きて、朝飯を造る。出来上がったころ女が戻ってきた。近くの川で体を洗ってきたのだという。明るい所で見ると、びっくりするような美人だった。戦災で家族を失い途方に暮れて居たのだという。

この女が今の妻だ。

（完）

（よしこ）

【風の談話室】　《読者投稿》

西海道へ

京都府木津川市　今井　直

旅に出るのは久し振りだ。行先は九州で西海道の国府巡りが目的である。木津川市から太宰府までおよそ650㌔㍍、何度も往来できる距離ではない。九州は13年前に別府と阿蘇を旅行したきりで、西海道国府は未踏の地ばかりである。全国旅行支援が折角の機会なので、筑前・筑後・豊前(ぶぜん)・豊後(ぶんご)・肥前・肥後をぐるっと巡ることにしたら12泊13日になった。

吉野ケ里(佐賀県)では、学術的価値の高い遺構や遺物を公開しながら、遺跡の整備が続いていた。広大な園内には、復元された竪穴住居や高床倉庫などが建ち並び、大型の祭殿や物見櫓が特に人目をひく。工房や市場・防護柵・機織り機など、弥生人の暮らしが手に取るように実感できる。集落はムラからクニへと発展し、およそ700年もの間、国内最大級の環濠集落を形成して栄えていたと言う。邪馬台国の所在地が九州説であれ大和説であれ、古代に北部九州に独自の文化圏が存在したのは確かだろう。

肥前国府は、その吉野ケ里から西へ約12㌔㍍の長崎道・佐賀大和ICのそばにあった。古くからこの周辺は遺跡埋没の可能性が想定されていて、高速道路の建設計画に伴い、昭和50年(1975)から10年にわたる発掘調査の結果、平安前期の国庁跡が見つかった。今では礎石が残る国庁跡は平面整備され、法隆寺の東大門を参考に南門と築地塀の一部が実物大で復元されている。官衙関連遺跡や国分寺などは市街地のため、全面的な発掘調査はまだ行われていない。

どの国でも国庁(政庁)は方1町(108㍍四方)ほどの広さである。築地で囲まれた国庁域は、たいてい中央に南向きの正殿、その前方に儀式などが行われる前庭を挟んで、南北に細長い脇殿が左右に配置される。発掘後その調査結果に基づいて史跡整備がなされている国庁跡は、実はそう多くはない。国庁跡と確認されても更地のままならまだしも、竹藪と化している所も…。観光資源としても見ごたえがあるのは、秋田城跡(秋田市)や下野国庁跡(栃木市)・近江国庁跡(大津市)・伯耆国府跡(倉吉市)・周防国衙跡(防府市)などだろう。特別史跡に指定されている多賀城跡(宮城県)や大宰府政庁址(太宰府市)は、佇むだけでスッと古代にタイムスリップできそうな心地よい空間である。

肥前国は現在の佐賀県と長崎県(壱岐・対馬を除く)にあたる。『肥前国風土記』に「肥前国と肥後国はもと一つの国なりき」とある。肥の国(火の国)がいつ分割されたか不明だが、肥前と肥後は不思議なことに隣り合わせではない。(筑前・筑後、豊前・豊後のように通常は分割後も隣接するのだが…)陸上は緩衝地帯のように筑後国を挟み、海上では有明海を隔てて肥前と肥後は睨めっこしているのだ。廃藩置県からではなく、律令時代からずっと仲が悪いのだろうか?

熊本県は火の国と呼ばれ、阿蘇活火山を連想しがちだが、奈良時代には休眠期だったのか、阿蘇は噴火していないようだ。気象庁の火山活動資料によると、有史以降の噴火で最も古いのは貞観6年(864)で、13世紀半ば以後は断続的に今日まで噴火した記録が残っている。「熊本＝噴煙を上げる火の国」のイメージが固まるのは昭和の末頃で、熊本県が観光PRで「火の国」を前面に出し、一般化したと思われる。

「火の国」は八代海や有明海で見られる「不知火」に由来するという説がある。海面と干潟の温度差により、漁火が不規則に屈折して見える蜃気楼の一つだが、昔の人々には不可解な現象で不思議そのものだった。あるいは遠浅の海に広がる大きな干潟から、「干の国」になったという説もある。天草へ向かう途中、長部田(ながべた)海床路(かいしょうろ)を見て合点がいった。それは長部田集落の沖合で海苔や貝類の養殖を営む漁業者が、資材や収穫物をトラックで運搬するため建設した道路だった。「漁業関係者以外は車両通行禁止」の看板があり、コンクリートの道が約1㌔㍍も海へ向かっ

て延びている。干満差が大きい有明海で、この道は干潮時にだけ現れ、満潮時には道端の電柱24本が沖に向かって整列する不思議な光景に変わる。遥か沖合で電気を使っている訳でなく、夜間に漁船が安全に往来できるよう、電線は電柱の街灯用なのだ。

「火の国・干の国」は当て字である。大和言葉には文字がなかったので書き残す場合、漢字の音を用いていた。そのため地名の文字数はバラバラだった。和銅6年(713)に元明天皇が地方統治の指針とするため、各国に『風土記』という地誌を提出するよう詔を出した。その際、地名はすべて好ましい漢字二文字に統一するよう求められた。好字二字令と言う。今日まで伝わる68の旧国名はすべて佳い漢字二文字である。

平安中期に成立した『和名抄』には、「肥後國 國府ハ益城郡(ましきのこおり)ニ在リ」と記されている。(先ごろの熊本地震で、益城町はマグニチュード7.3最大震度7を記録し、多くの被害が出た所だ)しかし、益城で国府跡はこれまで見つかっていない。一方、水前寺公園の近くに国府(こくぶ)という地名があり、法灯を継ぐ国分寺も現存する。奈良時代にはこの地に国庁が置かれていたが、平安期に益城へ移転したのではと推定されている。かつては大伽藍を誇った肥前国分寺だが、今は小ぢんまりとした寺院だ。唯一、往時を偲ぶことができる七重塔心礎が、なぜか近隣の熊野坐神社境内に居座っている。ビルに囲まれて長径2.6㍍・短径2.4㍍・高さ1.8㍍の巨石が、時の移ろいを眺めているようだ。

肥後一之宮の阿蘇神社(阿蘇市一の宮)でも、熊本地震で拝殿と楼門が全壊した。拝殿は再建されたが、楼門は全解体して修理中である。この楼門は高さが約18㍍あり、筑前一之宮・筥崎宮や常陸一之宮・鹿島神宮の楼門とともに日本三大楼門に数えられる。私は南阿蘇や熊本城など各地で、6年経った今も残る災害の大きな爪痕を目の当たりにした。同時に復興に向けて立ち上がる人々の逞しさに感動する旅でもあった。

さて、豊前国は福岡県東部(北九州市や行橋市)及び大分県北西部(中津市や宇佐市)に相当する。「豊前國 國府ハ京都郡ニ在リ」―京都にみやこと読み仮名が付けてあり、現在の地名も福岡県京都郡みやこ町。ん?この町が都?住めば都か?地名の由来は『日本書紀』に「熊襲を征伐すべく景行天皇(ヤマトタケルの父)が西下された折、豊前に行宮を設けてお休みになった。それでみやこと呼ばれるようになった」とある。国府跡は東九州道・みやこ豊津ICの近くにあり、豊前国分寺跡とともに史跡公園として整備されている。

豊前一之宮は宇佐神宮(宇佐八幡宮)で、天平時代には奈良の朝廷と強い結びつきがあった。聖武天皇が大仏造立にあたり、宇佐八幡神を勧請して東大寺の鎮守とした。手向山八幡宮だ。これが神仏習合の発祥とされる。更に称徳天皇の時には、和気清麻呂が宇佐八幡の神託を奏上して、皇位を狙う弓削道鏡の陰謀を阻止した。朝廷はこんな重要事項を、なぜ伊勢神宮でなく、遠くの宇佐神宮に伺いを立てたのだろうか?

豊後国は大分県の北西部を除く大部分を占めていた。国府跡は未確認だが、豊後国分寺(大分市国分)は大官大寺式の大伽藍で、七重塔は総高67.3mの壮大さを誇っていたようだ。史跡公園に隣接する大分市歴史資料館の吹抜けロビーに、縮尺10分の1の復元模型が聳えている。2F展示室への階段を上がりながら、七重塔の最上部に至るまでその精密な構造を身近に見学できる。

旅の終わりに坂本八幡宮(太宰府市)へ「令和の碑」を見に行った。この八幡宮は梅花の宴を主催した大宰府長官・大伴旅人邸跡と伝わる地で、新元号の出典「梅花の歌三十二首序文」(万葉集巻五)の舞台である。梅林に囲まれ大宰府政庁跡を望む境内に建つ碑は、人の背丈ほどある御影石だ。碑陰には《新元号発表時に菅官房長官が掲げた「令和」の書と同じ内閣府辞令専門職・茂住修身(もずみおさみ)氏が揮毫した》とある。

「初春令月　氣淑風和」の八文字のように、

今年こそ和やかな風がそよぐ

佳い時がすごせますように

【風の談話室】　《読者投稿》

やさと暮らし（71）

さと女

つくばセンターからフラワーパークまでバスが出ています。フラワーパークのイルミネーションの期間、土曜日曜限定発車です。

それを利用してつくばの弟夫婦がやって来ました。フラワーパークまで迎えに行き、人生の楽園を見て、ずっと行きたかったという岡野ファームでランチ、13塚を案内、わが家でひと休み、その後フラワーパークに行き園内を散策。バラも結構咲いていました。そして5時目的のイルミネーションが点灯。楽しいやさと巡りもあっと言う間に過ぎて、また、バスで帰って行きました。バスには家族連れなど結構な乗客が乗っていました。

今日は1日中西風が吹き荒れた。

隣のすっかり葉っぱを落とした柿畑。その葉っぱが1日中わが家の庭で舞っていた。何処もここも葉っぱだらけ。柿の葉っぱは始末がしにくい。袋に詰めようとするとパラパラと粉々になってしまう。まあ、明日から少しずつ掃除するしかないなぁ

今朝は寒かったですね。近くの池には薄氷が張っていました。近所ではロウバイが咲いています。空は素晴らしい青空でした。

今年のエコクラフト終わりました。毎週木曜日皆さん元気で集まり、お口も手も、よく、動きました。最後にママさん手作りのケーキを頂き、1年間無事に集まれた事に感謝しました。オリーブさんありがとうございました。

今年一年何事もなくクラフトランチ皆さんに支えられ毎回手作りメニュー頑張りました食欲無い方が肥ってきたよって言って笑顔に、作りがいがありましたし勉強になりました。来年も楽しみです宜しくお願いします　(^^)/□

本当に毎回工夫されたランチありがとうございました。皆さん楽しみに頂いていました。ひとりで食べるよりみんなで食べる楽しさ、美味しさ、元気の源ですね。来年もよろしくお願いします。

【読者からのひとこと】

●「会報　ふるさと風」を読んで、

小倉味噌店　小倉美代子

地元の歴史・文化のすばらしさを再発見させていただいております。挿絵も大好きです。会員のみなさまの情熱とご尽力に脱帽し、ありがたく、感謝申し上げます。

●ふるさと〝風〟二〇〇号記念誌発行、おめでとうございます。

池田釣具（笑魚堂）　吉田文香

池田釣具の前をピンクのシャツに綿ペン姿のスッキリした細身のロマンスグレー（白井啓治先生）が往来する街中をふと思い出しながら愛読させて頂いてます。毎回号〝池田先生よろしくお願いします〟と一冊ご用意頂き有りがとうございます。周辺の歴史や会員の皆様の言葉にふれながら、少しずつ歴史に目を向ける気持ちが自分の中に育ち、又、発見も有りました。石岡タローの活気ある石岡で育ち、落ち付いた町中に年に一度金丸通りを直進するかの様に沈む夕陽を近年母と二人で知ることが有りました。歴史と文化の再発見と創造、これからも楽しみにしています。

●ふるさと〝風〟二〇〇号記念誌発行、おめでとうございます。

石岡市　河村貞代

私は山梨の出身ですので霞ヶ浦周辺地域の歴史・文化の知識が心にしみます。文章・絵・写真により楽しみながら学んでおります。

本当に創刊からいただきまして有難うございます。今後のご発展を心からお祈り申し上げます。

●「二〇〇号」記念誌発行おめでとうございます。

石岡市　持田順子

長きに読ませていただいた事、感謝・感謝です。一七年近く毎月発行続ける事の大切さ、すばらしいお仲間なのですね。

私一七年も何していたやら・・・・

これからも健康第一とし、皆様ご活躍されますよう願っております。

●ふるさと〝風〟を知ったのは、兼平さんとの出会いがはじまりです。石岡の歴史を教えて戴き広い茨城を知ることも出来ました。

はじめてギター館で小林幸枝さんの手話舞、白井先生の朗読、そしてバックにギターの曲が流れ「常世」の物語りに心が震えました。

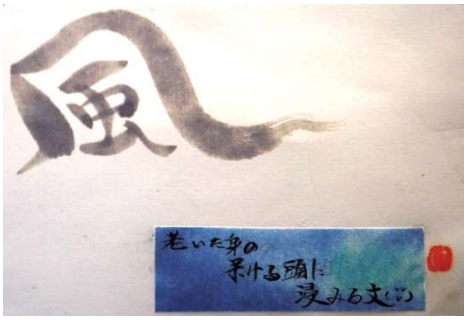
素晴らしい皆様のご活躍が凝縮された「ふるさと〝風〟」だとおもいます。

二〇〇号達成おめでとうございます。

（太極拳サロンみなみ　伊丹克子）

●兼平さんへ
私の一言は誇りです。
長い間ありがとうございました。
今後もがんばってください
（A・K）

●伊丹さんがふるさと“風”を届けてくださいました。　呆（ほう）けている頭の私ですが・・・・・心が揺れました。ありがとうございました。（笑）



（老いた身の　呆ける頭に　浸みる文）
（敬子）

●発刊２００号おめでとうございます。
石岡市の近郊・土地情報・日常のたのしみその風景を頭に浮かべながら、読む事ができました。宝篋山登山の帰りに菖蒲沢薬師如来坐像、黒塗り薬師様を見た時、ぞっとする怖さを感じました。風の会方々の活躍には頭が下がります。
有難うございます。
（一愛読者より）

●ふるさと“風”は他の市にない歴史・文化の再発見に寄与している会報と思います。
ふるさとに眠る歴史・風習などを素晴らしい文章で紹介して下さいます。
２００号からは年四回となるそうですが、益々の発展を祈ります。
（斎藤富美子）

●弓子先生の記事、毎回楽しみにしています。子供が小さい時、玉里村に住んでいたので、先生の文章に風景を感じ、又ちょっとした風刺もおもしろいです。今後も楽しませて下さい。
（石岡市　杉浦けい子）

●お忙しい中をいつも何かと、ご配慮いただきありがとうございます。いつも心を込めて精一杯活躍されて、又、執筆されているお姿を思うたび、ただ頭が下り、無理はしないでねと願っています。そして今迄たくさんいただいた“ふるさと風”を時折読み返す度、新たな感動に気付き大切にしています。
まだまだ読み残しが残っていますので、今後はこの貴重な作品を若い方々に廻して上げてください。
今後ともお元気でご活躍くださいね。　（勝子）

（会員より）この読者・勝子さんは若い時からの友です。保母とよばれていた頃の仕事仲間でした。“ふるさと風”を通して一生お付き合いが出来た大切な友です。
（伊東弓子）

思いつくままに

西方保男

私は、今年、（２００２２年1月１６日）、東京は文京区から茨城県石岡の地に引っ越してまいりました。
この地に来て新たに住まいする家の窓から遥か遠くに霞む山並みを眺めていると、ふと、フォーク歌手武田鉄矢の“思えば遠くに来たもんだ”の歌詞が思わず浮かんだ。それは、感傷、哀感、寂寥感、などと言う心情とは少し違う、齢を重ねると誰にでも訪れる、所謂、無意の茫洋感みたいなものかも？
さて、過日、このたび、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考えるふるさと“風の会”に入会のご縁をいただきました。
お陰で、おそらく晩節を過ごすことになるであろうこの地“常陸の国茨城”を知る好い機会を得ることができました。
このふるさと“風”の会では毎月会報が発刊されています。石岡市内を散策した折、ある釣り具屋さんの店先に置いであった会報を初めて目にしたのであります。この地を知るいい機会だと手に取って見たのが風の会との最初の出会いです。何も解らないこの地の歴史を知りたいという欲求が会とを結んでくれたのかも？
右も左も全く知らない地を知りたい者からすれば、大げさにいえば、何か欲しいものを探し当てたような嬉しさが込み上げてきたように感じたのであります。人は、場所も何もかもすべて未知の地に踏み込むとこんな感慨が浮かぶのかと思ったものです。
早速“風の会”事務局長の木村進氏を訪ね、

お会いしたのである。
その折、“ふるさと風の会”発行の【風の文庫・ふるさと石岡　歴史の散歩道(3)木村氏の著作・府中城跡・常陸国総社宮と市内の社寺巡礼】を購読し、目にした時も同様の思いをしたのです。
それは、氏の著作の中の次の件（くだり）です。

(C)(丸山)佐志能神社(P.83の一部抜粋)
　石岡市には龍神山にある二つの佐志能神社の他にもう一つの佐志能神社が旧八郷町の中心部柿岡の近くにあります。
佐志能神社は山の中腹にあり、丸山古墳と共に一体が公園風になって、います。(略)
神社の隣に丸山古墳があり、この古墳と一体となった神社のようです。説明では「豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)」の奥津城と書かれています。豊城入彦命は第十代崇神天皇の皇子で古墳時代に東国の平定のために東山道を経由してやってきて戦った人物とされます。神社境内にはいくつもの石仏が置かれ、神社の本殿は囲いに覆われてよく見ることはできません。(略)

　私は、この記事を読み進めながら、以前から、歴史(古代史)興味を覚えたことが色々思い起こされてきたのであります。茨城の地に来て、かねてより、思い巡らす思案を解明する端緒がなにか見い出せるのではと、心待ちにしていたので、とても嬉しく思いました。その色々ある、思案の一つに、「日本書紀」で、大和朝廷が勢力を東方地域へ侵攻拡大したという歴史的な事実の確証は一体、何辺にあるんだろう?という素朴な思いでした。
大和朝廷が東方へ勢力進出をしたという史実を示す伝承は、日本書紀　巻第五　御開城入彦五十瓊殖天皇（みまきいりびこいにえのすみらみこと）第十代の崇神天皇（すじんでんのう）の“夢見伝承”に次の記述が見える。

　四十八年春一月十日、天皇は豊城命（とよきのみこと）・活目尊（いくめのみこと）に勅して、「お前たち二人の子は、どちらも同じように可愛い、何れを後嗣とすべきか分からない。それぞれ夢を見なさい。夢で占うことにしよう」と。
二人の息子は命をうけたまわって、浄沐してお祈りをして寝た。
それぞれ夢をみた。夜明けに兄豊城命は、夢のことを天皇に申しあげられ、「御諸山（みもろやま）に登って東に向って、八度槍（やたびやり）を突き出し、八度刀（やたびかたな）を空に振りました」と。弟の活目尊は「御諸山の頂きに登って、縄（なわ）を四方に引き渡して、粟（あわ）を食（は）む雀を追いはらいました」と。
天皇は夢の占いをして、二人の子に、「兄は専ら東に向って武器を用いたので、東国を治めるのによいだろう。弟は四方に心を配って、稔（みの）りを考えているので、わが位を継ぐのによいだろう」といわれた。
四月十九日、活目尊（いくめのみこと）を立てて皇太子とされた。豊城命（とよきのみこと）を以て東国を治めさせた。これが上毛野君（かみつけのきみ）・下毛野君（しもつけのきみ）の先祖である。
以上は、日本書紀の崇神天皇の夢見伝承の条である。(宇治谷孟・日本書紀参照。)

　そこで私が、兄の豊城入彦命の夢見の記述に注目したのは「崇神天皇に告げた夢見の内容である」。「私、豊城は、御諸山に登って東を向いて八度鉾を突き出し、八度太刀を振りました」と天皇に告げた」この記述にあるのだ。
八度鉾を突き、八度刀を振ったという記述に、「八」という数字を二度も明記し、ことさらに、強調していることだ。この表現はなにを示唆してるのか。あくまで、私見の域だが、書紀の編者は「八」という数字に朝廷に従わない対象の被征圧民族を明らかに明示しているように思えるのだがどうだろうか?

　つまりそれは、この古墳時代に於いては大和朝廷に迎合しない征討すべき存在として、まつろわぬ民、蝦夷（えみし）か?　を彷彿とさせるのだ。つまり彼等の存在に対して、「八度（やたび）」という表現を二回も繰り返して、征討の対象、それを明確に強調しているやに覗えるのである。

　こうした観点から、次に、木村氏の探査された佐志能神社と丸山古墳、豊城入彦命の奥津城や東征内容についても興味深く、柿岡考古博物館や現地を訪ね、かねてからの思案の解決の糸口になることを期待しております。私はまだこの地を訪ねていないので期待がふくらみます。

石岡市内に残る有名人の墓所について

出山　敏文

市内には沢山の神社とお寺があり、散策している内、歴史上に名を残す人物のお墓が多く存在することに気が付きました。それらのお墓を順不同により、紹介したいと思います。

（1）都々一坊扇歌。市内国分寺に都々一坊扇歌堂が建っています。そこに書かれた案内板によると、(常陸太田磯部)に生まれ、幼少の折、病で失明同様となり、その後芸の道に進み、「都々逸節」で一世を風靡したが、当時の政治や社会を批判したため江戸追放となった。その発端となったのは

「上は金下は杭なし吾妻橋」

の一句であった。江戸を追放された扇歌は、姉の嫁ぎ先府中（石岡）香丸町酒井長五郎の旅宿に身を寄せ（一八五二年）四十八歳で没し、同国分寺のお墓に眠っています。石岡市在住だった高橋武子氏の著書「都々一坊扇歌の生涯」に詳しく書かれています。

扇歌堂
墓は境内の酒井家の墓地に葬られている。

（2）鈴木万能。農具の「万能」をつくった鈴木万能の墓が市内常光院に建っています。また万能を製作したといわれる杉並の「アツバイ」の地に「万能塚」が建てられています。

万能塚(杉並)
墓は常光院にある

（3）新撰組で名を馳せた伊東甲子太郎・鈴木三樹三郎兄弟。兄の甲子太郎は京都で刺客に暗殺されて、京都の「戒光院」に眠っています。旧志筑藩士であったことから、現かすみがうら市歴史館館長の尽力により、最近志筑城跡に顕彰碑が建てられました。

伊東甲子太郎顕彰碑

かすみがうら市の志筑城跡に立っています。

（4）弟三樹三郎も兄と同様新撰組に入隊し、九番隊長となる。のちに西郷隆盛の援助により罪を許され、明治政府の官史として任え、山形県警部、酒田警察署長、福島県学務課長を歴任し、明治18年石岡市元真地（総社）に隠退した。　お墓は市内東耀寺に所在する。

手塚良運。良運は漫画家手塚治虫の縁戚で、治虫の曽祖父の手塚良庵のいとこになります。良庵は小石川の常陸府中藩の藩医をしており、廃藩置県後にこちらの市内に戻りこの地で没したといいます。良運の墓は市内清涼寺にあります。また、手塚治虫の長編漫画「陽だまりの樹」は常陸府中藩の藩邸にいた漢方医師「手塚良庵」（曽祖父）と常陸府中藩の下級藩士「伊武谷万次郎」を主人公として描いています。

（5）常陸大掾氏墓所。市内平福寺にある市指定史跡大掾（だいじょう）氏の墓所に掲げられた案内板によると、中央に最大の五輪の塔、それを囲む3方向には、14基の五輪の塔が林立している。これらの五輪の塔は、平安時代から戦国時代まで常陸国に勢力を誇った豪族、常陸大掾氏代々の墓塔と言われていますが、平氏の祖といわれる国香の墓は現在まで確証されていません。

常陸大掾氏墓所

平福寺の五輪塔
（市指定史跡）

真偽は定かではないが「新編常陸国誌」に国香の墓は湊村（ひたちなか市那珂湊）の浄光寺にあり、との記述がある。又筑西市東石田の長光寺が国香の館跡といわれ、

（6）周囲に国香の墓も残るといわれています。常陸府中藩主の墓。常陸府中藩主松平家墓所（史跡）の案内板によると、府中松平家は初代水戸藩主徳川頼房の五男頼隆を祖とし、水戸徳川家の分家四藩（高松・守山・宍戸・府中）の一つとなったとある。十代頼策のとき明治維新を迎える。歴代藩主の墓地は小石川の宗慶寺にあったが、大正十五年ここ石岡市内照光寺に移したとのことである。

照光寺の歴代藩主の墓石
（徳川水戸家の紋）

（7）市内平福寺に伝わる平景清の墓について。五輪塔の存在する平福寺の案内板によると、享保年間（一七一六～一七三五）の古文書によると「平福寺の景清観音堂は、先年岩城城内から引き立て置いたものである」とある。平景清（藤原景清）とは、平安末期の武将であり、石岡で誕生したという伝承があり、墓の他に景清塚が残されている。

（8）藤原惟道（これみち）。正一位青木稲荷神社の案内板によると、平安中期第3代平為幹（ためもと）の時代、源氏物語の作者として有名な紫式部の異母弟である藤原惟道（これみち）が、寛仁3年（一〇一九）常陸介（ひたちのすけ）として京より当地国府に赴任したが翌年病死しまう。為幹は未亡人となった惟道の妻の美しさから邪心を抱き我がものにしようとする事件を起して京で裁きを受けたという逸話が残っている。定かではないが、惟道の墓が市内東耀寺にあると伝えられている。

（9）大久保いく。水戸藩士による天狗党事件のおり、隊士に集合場所や多額な軍資金を提供した女傑（じょけつ）と言われた鈴の宮稲荷脇どなり新地にあった紀州屋の女将（おかみ）大久保いくの墓が市内本浄寺にある。

（10）国学者鬼沢大海。鬼沢大海（おうみ）は常陸国高浜生まれで、本居大平（たいへい）の門に入って国学・歌道を修め、はじめ笠間稲荷神社、ついで石岡総社宮の祠官を務め、明治八年（一八七五）十一月、八十三歳で没し、高浜地内観音堂跡に墓がある。

鬼沢大海の墓
高浜の観音堂裏手に立つ。

（11）佐竹義政の首塚。源頼朝が治承四年（一一八〇）に常陸国府中に四日間滞在し、常陸太田にいた佐竹氏兄弟に帰順勧告を送り呼び出して、やってきた兄義政を大矢橋（石岡市正上内）にさしかかったとき、頼朝の命を受けた上総広常が佐竹義政に切りかかり、義政は殺され、首は橋の近くに葬られ、胴は少し離れた行里川に埋められと伝えられています。現在園部川に架かる大矢橋の側に首塚が残されている。この事件については史実として「吾妻鏡」の中に記されているとのことである。

佐竹義政の首塚
大矢橋の脇に立っている。今は近くに高速道路のスマートインターができて様変わりしている。

（12）太田三楽斎資正。太田道灌の曾孫である太田三楽斎資正（すけまさ）は片野城主をしており、この地で没した。墓は旧八郷町根小屋地内佐久山浄瑠璃寺に残されています。

太田三楽斎資正の墓
片野城跡近くの瑠璃寺境内に眠る

（13）山県大弐。同じ旧八郷町根小屋地内の泰寧寺（たいねいじ）に山県大弐（やまがただいに）の墓があります。大弐は山梨県竜王町（現甲斐市）篠原に生まれ、宝暦九年（一七五九）に「柳子新論」を著し尊王論を説き、そのことにより幕府転覆の罪

で捕縛され小塚原で処刑されたが、八郷町根小屋出身の門下生薗部文之進が、真夜中に師の首を奪って帰郷し、根小屋の自宅に埋葬し立ち去ったと伝えられています。

（14）島津久光の従士。文久二年（一八六二）に起きた生麦事件でイギリス人を殺傷した、島津久光の従士の墓が、市内東耀寺にあるといわれています。

このように石岡市には歴史的遺産が、沢山残されています。これらの遺産を保全するとともに、ここ石岡の地から多くの人々が発信することにより、石岡の歴史と文化に関心を持ってもらえればとの想いで今回書かせていただきました。このような機会をいただいた木村進さん並びに風の会会員の皆様に御礼申上げます。

今後の風の会の益々のご活躍をご祈念申上げます。

【ちょとひとこと】

歴史っていったい何か？

木村　進

企業の定年が間際に迫ってきた頃から、地元の埋もれた歴史に関する記事などをブログのテーマにして書き続けているが、いまだにこの「歴史」ということがわからない。

私は、元々理系人間で中学生の頃から学校での歴史授業は好きではなかった。

暗記すべき年代や人物名などがたくさんあり、これを覚えなければテストでは良い点数が採れない。そのため中学高校などの歴史授業は、受験勉強のためにやむなく勉強したに過ぎない。

特に途中からは世界史の専攻になったので、日本史はいまだにチンプンカンプンだ。

今思えばこの歴史授業がどこかおかしいのだという気がしてならない。

こんな名前や年代などは調べればわかることであり覚えなくてもよいのではないかと思う。

「歴史（れきし）」は「暦史（れきし）」であり、大昔は「暦（こよみ）」の記録に過ぎない。

中国の「史記」が歴史書のはじめといわれるように「史」そのものに現在でいう「歴史」の意味があったという。

しかし、歴史学なるものが出来て、また「歴史認識」などというわけのわからない言葉に置き換えられ、益々混迷してしまっている。

自分の都合の良いように歴史の事柄を変えたり、追加したり、無視したりする時の権力者や歴史家と称する人が大昔から現在まで数多く存在し、教科書などもどこまで信用してよいのかまったく見当も付かない。

また、国家レベルでも、どこの国も自国の都合の良いようにしたがるため、正確な歴史は殆んどの国で存在しないと言っても良い。

地方で言えば、市史や行政の説明看板、パンフレット、ちらし、ホームページなどに書かれていれば全て事実と思いがちになる。異なった事実が明らかになっても、行政や有名な教育者の話などが先にあれば正しいと思い込む。特に読み手は自身の都合の良いことだけを信じようとする。書かれている事柄の自分なりの検証をすることをほとんどしない。

まあでもこの地に来て16年ほどになる新参者ではあるが、この間に知り得たことを少しでも残しておけば後の世に何か役に立つのではないかと思いいろいろと発信を続けている。当然私の書いているものもどこかで事実を捻じ曲げられた事柄にすぎないものもあるかもしれないが・・・・。

歴史　今　伝えたいこと

（前石岡市長）今泉文彦

石岡市には歴史遺産が豊富に眠っている。どこを掘っても遺跡や埋蔵文化財が出て来るし、国衙《こくが》跡や国分寺・尼寺跡、寺社仏閣や言い伝え、伝説、昔話など有形無形のさまざまな歴史的遺産に触れることができる。

けれども、これらの歴史遺産は、大切に守られているだろうか。

国指定史跡の舟塚山古墳は県内最大の古墳だが、全長１８６メートルの前方後円墳の何ヶ所かが土砂崩れを起こしており、古墳自体もこのまま放置しておくと台地ごと崩落の危険性が高まることは否定できない。

中心市街地には、30棟の看板建築があり、そのうち17棟が国指定の登録文化財である。いずれも築90年を過ぎていて、所有者がいつ解体すると言ってもおかしくない。関東大震災からの復興によって誕生した建築様式だが、石岡ではこれまでに大半の看板建築が解体されて今日に至っている。

常磐高速道路の用地として遺跡の大部分が消えた鹿の子遺跡は、武器工房としての機能を常陸風土記の丘の一角に再現し往時の歴史的情況を伝えている。

以上のように、遺跡崩壊の恐れと歴史的建造物の保存、消えた遺跡の記録など3例をあげたが、後世に伝え残していくためには課題は山積している。

郷土の歴史遺産は、どれを残し、どう伝承していくのか。時代の変化と発展の均衡の中で、どの時代もどの地域も模索と彷徨を味わっている。無策と諦観は、自然消滅を待つばかりで、保存と伝承の努力によって発見する先人の知恵と歴史の示唆に触れることはない。

私たちは、子どもたちに何を残し、何を伝えるのか。

それを深く考えてみたい。

序章　石岡の歴史遺産を物語る写真

1　常陸国分寺仁王門

□　2　大正時代の中町通り

□ □ 看板建築が連なる大火後の中町通り

4. 御幸通りと中町通りの交差点

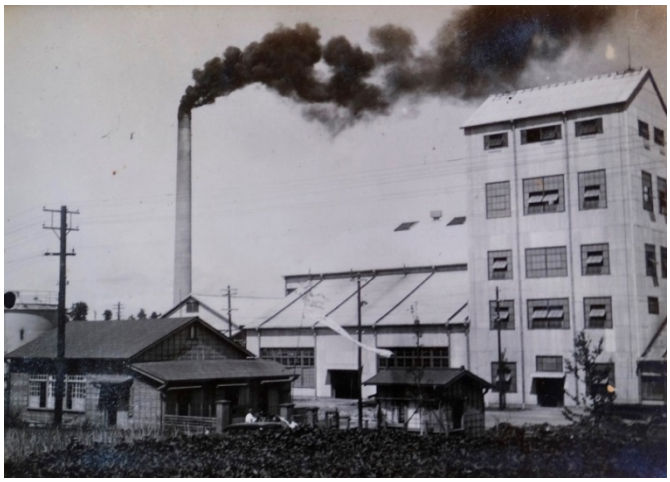
5 ヨーロッパの町を彷彿させる昭和初期の街路

7.　昭和 19 年の夏に石岡駅に降り立った
東京墨田区の学童疎開児童

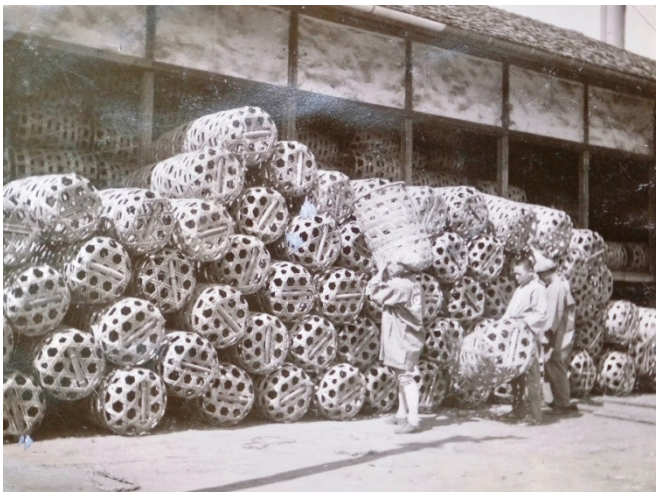
6.　昭和 20 年に近くなると英霊の帰還が増えた

9　酒造元の揃い踏み

8.　木造 3 階建ての橋本旅館



11　石岡アルコール工場の操業開始



10　小口製糸工場の繭かご

明治維新は日本がこれまでになく大きく舵を切った時代で、急激な近代化・西洋化がはじまった。その時期、多くの外国人が訪れ、日本と日本人の様子を書き記している。

イギリスの女性旅行家イザベラ・バードもその一人で、彼女は日本人を次のように描いている。

「小柄でガニ股。親切で勤勉、礼儀正しく、子どもを本当に大切にしている」日本人の内面を理解したバードは、この国の急激な西洋化がその価値観を変えてしまうことを案じた。

同時期、研究のため日本に滞在したアメリカのエドワード・モースは、次のような言葉を残している。

「この国のありとあらゆるものは、日ならずして消え失せてしまうだろう」

仁王門の扁額は、いつの間にか「仁王門」から「国光宣揚」に変わり、石岡のような地方の町にも近代化が押し寄せていることが分かる。

一．故郷の歴史を守り、伝える人

郷土史研究の父　手塚　正太郎　「市報いしおか」昭和60年3月号

細身で長身、筆まめで厳格。東京で漢学を学び、素直で重厚な人物だったという手塚正太郎氏。彼は安政二年(一八五五)府中藩士・手塚大吾の長男として生まれました。

石岡小学校の二代目校長として三十四年間勤め、退職後は石岡町助役となり町の発展に尽しました。

「朝早く声を上げて新聞を読んでいたのが強く印象に残っています。日記もまめにつけていましたね」と追想するのは府中病院のドクター手塚邦彦先生(77)、正太郎氏の孫に当ります。

「祖父は厳格でしたが、孫の私には優しかったようです。日曜日ごとに山や野を歩き遺跡巡りに連れていってもらいました。

ハカマ姿に草鞋をはいて、革のカバンを手に、もちろん山高帽もかぶりました。

尼寺が原へ行って草を刈り、掃除をさせられたり、礎石を盗まれないよう監視に行かされたりもしました。当時は史跡の価値が今のように認められてなく、石を庭石や記念碑の台にするといった事件が後を絶たなかったのです」

総社宮の拝殿の前にある榎の御神木を眺めながら邦彦先生は懐かしそうな表情です。

御神木に寄り添うように〝扶持是神力〟と書かれた石碑があります。手塚正太郎謹書とあり裏には大正五年一月と刻まれています。

「この拝殿が焼けた時、この巨木も大分炎を受け焦げたのですが、今日こうして生きているのは神力のおかげかも知れません。いや、こればかりでなく市内にある多くの史跡が今なお大切に残されているのは、神力ならぬ郷土石岡を愛する人々の人力のおかげなのかも知れません」

歴史の里いしおかをこよなく愛した手塚正太郎の墓所は、若宮一丁目の東耀寺にあります。

二．徳川家康がつくった霞ヶ浦？

山と河と湖

関東の地図をながめていると、利根川と霞ヶ浦、筑波山に目がいく。

いずれも関東平野における自然界のシンボルだ。

日本一の大河である坂東太郎こと利根川は、全長３２２キロメートル、支川数２８５本で、流域面積は1万5千７００平方キロメートルに及ぶ。その姿は、関東平野に横たわる大蛇のようだ。

そして、日本第二の大きさを誇る霞ヶ浦は、手のひらのようなシルエットで水を湛え、利根川と合流し、たおやかな水郷の風景をつくりだしている。

万葉の昔から歌に詠まれて来た筑波山は、千年もの間変わらぬ姿を水辺に映し出してきた。

河と湖と山、いずれも昔から同じ姿であると思いがちだが、関東の河と湖は大きく様相が変わっていた。

霞ヶ浦は、中世までは流海《ながれうみ》と呼ばれ太平洋に繋がる内海だった。「常陸国風土記」によれば、鯨以外の魚はほとんどいるし、岸辺に塩を焼く藻が生え、塩水の入海であることを知る。

風土記の文中に高浜の海を描いた一節がある。

春は浦の花千々に彩り
秋は是れ岸の紅葉百に色づく
歌う鶯を野の澁《ほとり》に聞き
舞う鶴を渚《す》の汀《みぎは》にみる
村郎《むらおとこ》と漁嬢《あまをとめ》とは浜洲《はま》を逐《お》いて輻輳《あつま》り商人《あきひと》と農夫《たひと》とは許舟　《おぶね》に棹差して往きます

高浜の海の季節の移り変わりがなんと美しく描かれていることだろう。避暑地のように人々の集う水辺が、生き生きと魅力的に表現されていて、行ってみたくなる。

川はいくつも名前があった

中谷津川、木間塚川、白久川、山王川、塩橋川。これが、古文書や古絵図に出てくる山王川の地域別の呼び名だ。

恋瀬川になると、古伊勢川、高友川、志筑川、表川、鯉川、中津川などが本流で、そこに小桜川、天の川などの支流が加わりさらに数は増える。地域ごとに川の呼び名が違ってはなにかと不都合だと、名称統一されたのが、明治17年の陸軍迅速地図完成の時だという。

さて、日本最長の川・利根川はどうだろう。それ以前に河川改修を至る所で行い、川そのものが付け替えられたり、埋められたりして、河道が東へと集約されて、最終的には銚子の突端に流れ出るようになった。

この一連の大型プロジェクトは、徳川家康が江戸の街の発展を目的とした「利根川の東遷事業」と呼んでいる。

戦国時代の末期、利根川をはじめとする何本もの河川は、江戸の町を横切って東京湾に流れ出ていた。

そのため、台風や大雨などの悪天候になると、江戸の町は水浸しになり、その後も湿地帯になったままだ。これを放っておくと被害が拡大し慢性化するばかりでなく、江戸のまちづくりに際して有効な土地利用ができなくなってしまうため、合流する川の大半を銚子の突端の方へ、付け替えることにした。

家康は、この東遷事業を家臣の伊奈備前守忠次に命じた。忠次・忠政・忠克と伊奈家3代60年かけて、利根川は今の流れとなった。

東遷の当初の目的は、洪水防止・土地の有効利用だったが、新しい河道が川と川を結びつけたため、利根川が物流の大動脈になるという効果も生まれた。

利根川・霞ヶ浦水運の隆盛

江戸時代、米俵を運ぶには馬や船を使った。馬の場合、1頭に付けられるのは2俵で、これを1駄といった。馬1頭に馬子一人、これに払う運賃を駄賃と呼んだ。

一方、船で運ぶ場合、船1艘に船頭一人で米俵は何十俵も積めた。

陸路だと人間と馬で2俵なのに、水運を使うと一人で１０００俵近くも運べる。したがって、運賃は船のほうが格段に安かった。このため、江戸時代の水運は物を運ぶため主流となり、海運とともに大河から小さな川に至るまでが水運の道となった。

当時の運賃を比較すると、以下のようになる。

・米1石を運ぶ場合の標準的運賃

海運 70里銀1匁6分
川運 10里銀1匁5分
駄賃 5里銀3匁3分

この数字からわかるように、陸路は船の5倍から数十倍も運賃がかかる。米やマキや農産物など大量の物資は、船に積まれるようになる。

江戸という大都市に物を運ぶために、利根川をはじめとする関東の大小の河川は、当然のように水運路となった。霞ヶ浦も同様で主要な水運の道となり、沿岸にいくつもの港が開け、湖面には何百という川船が往来した。

当時の船種と輸送量を見てみよう。

高瀬船霞ヶ浦　９００～１２００俵
中利根川　３００～５５０俵
鬼怒川　２５０～５００俵
那珂川　５００～６０００俵
平田船　３００～５０００俵
茶船　６０～１００俵
川下小船　２５俵

最大級のものは霞ヶ浦・北浦の高瀬船で、船頭と水主6～7人がこれに乗り、霞ヶ浦から利根川下流を行き来した。風のあるときは帆をかけて走り、それ以外のときは櫓を漕いだ。

筑波山麓の木材や桜川流域の米、土浦の醤油、石岡の清酒、そのほか流域の村々の様々な農産物が高瀬船で江戸へ送られた。霞ヶ浦の湖面に白い帆をあげて進む高瀬船は、佐原を経て利根川に入る。ここから関宿まで利根川を上り、江戸川を下って松戸～行徳と進み江戸の河岸へ向かう。

江戸からの帰り荷には、日用雑貨や衣料、麻、煙草、塩、砂糖、干鰯など、あらゆる生活用品が積み込まれた。

霞ヶ浦の水運は、江戸と農村とを相互に結ぶ太い幹線だった。そのような中で、商品流通の重要な役割を担う河岸は、湖岸の各地で大いに繁栄した。

水を治めるもの国を治む

平成16年、当時21年ぶりに噴火した浅間山の火山灰が、茨城県内にも降って話題になったことがあった。

そのときの9月の噴火は小噴火だったが、それでも30㎞も離れたところでも観測されたそうだ。

江戸時代の天明6年の浅間山大噴火のときには、多量の降灰が関東一円に舞い降り、川床を著しく高めたために、江戸の町や霞ヶ浦沿岸を浸水させたという記録が残っている。

霞ヶ浦の水郷地帯は、はけきれない洪水が長期間にわたって滞水し、稲は腐り収穫は皆無となることがしばしばだった。

特に、昭和13年の洪水は霞ヶ浦の歴史の中で最大級のものだった。

土浦では、桜川の左岸堤防が決壊し、市街の大半が浸水した。このとき水面に出ているのは土浦駅と鉄道線路だけで、死者5名・行方不明者1名を数えた。

濁流の停滞が十数日も続いたため赤痢・疫痢が発生し、防疫面での対応も強いられた。

この水害には、石岡から救援隊が参加し、広域的な水害復旧活動が展開された。

さらにその3年後、昭和16年7月には、利根川の上流部に大雨が降り、それが逆流して霞ヶ浦に流れ込み、洪水となった。土浦の浸水家屋は千戸を超し、鉾田町の浸水は20戸に及び、高浜の町も大きな被害を受けた。

逆流型の洪水だったため、浸水は下水や排水路から始まり、じわじわと水位が上昇し、完全に水が引くまでは2ヵ月もかかったそうだ。

全国市長会『市政』2018年12月号
わが市を語る　石岡市長　今泉文彦

ふるさとを伝承するまち

「地域のことを知れば知るほど面白いし、ここに生まれ育って良かったと思います」

本年10月に開かれた「第1回ふるさと学習サミット」で発表を終えた小学生の言葉です。

ふるさとに生まれ、暮らし、そこで育まれた子供たちは、その土地の風土や人々のまなざしの中で生かされてきたことに気づくでしょう。成長した彼らは、いつしか世界に飛び出し、日本を牽引し、地域社会の屋台骨を支え、地球のどこにいても頼られる存在となるはずです。

3年前から、石岡市では小・中学生を対象とした「ふるさと学習」が始まりました。これは子供たちが地域を探求し、歴史や伝統、文化、産業、慣習、伝説などに触れ、先人の郷土愛や地域社会の発展にかけた思いを知り、自分の原点を理解する取り組みです。そのことによって、子供たちの心に地域への誇りと愛情が育ち、例え火星に移り住んでも、帰るふるさとは石岡だと思い描くことでしょう。

この取り組みの手始めとして、府中塾と山根塾という二つの市民グループが題材を調査し、それを元に教師による編集チームが2年がかりで石岡オリジナルの教本を制作しました。

こうして「ふるさと学習」のカリキュラムがスタートしたのでした。

小学生から中学生までの9年間で「郷土を学び」、地域への提言をゴールとしています。

（中略）

最後に、一枚の写真を紹介します。

ふるさと学習サミットを終え、高い評価を受けた関川小学校で研究成果発表が行われました。児童たちが、共同制作した大人形ダイダラボッチを囲んで談笑しています。

笑顔から、ふるさとが楽しく伝承されていることが伝わってきます。

三、祖先のものを子孫に引き継ぐ

いはらき新聞／昭和46年6月14日号
今泉義文さん（石岡市史跡保存会副会長）
「文化財は神や仏」
―石岡は文化財の宝庫といわれていますが……。
今泉　三村、高浜などの貝塚は、縄文文化がす

でに定着していたことを示しています。西暦７４０年ごろには全国六十六ヵ所の一つとして国分寺が置かれ、東国の政治、経済、文化の中心地として、重要な役割を果たしていました。

市内の茨城という地名が県名の起源であるように、県内では最古の文化の華が開いたところです。

（中略）

―文化財保護法に欠点は？

今泉　それはあります。民家の場合ですが、指定されたために日常生活が脅かされている話もあります。参観人が来れば、お茶の一杯も出さなければならない。それでなくても管理、維持など経済的負担も大変なものです。指定したら指定しっぱなし、後々の面倒をみないと不備があります。それ以前の問題として、市民の声が反映されないというようなこともあるわけです。

（中略）それから国分寺の区に特別史跡指定は全国で3ヵ所、尼寺で跡が残っているものは全国で一個所。その両方が石岡市にあるわけで、開発が進んでいるとはいえ、まだ貴重なものが多く残っているのですから、それらの財産を生かしたいと思います。

（中略）

―最後に、今泉さんと文化財との出会いと今後の抱負について。

今泉　もともと古いものを調べるのが好きでして、二十歳ごろ古老の話などをメモしていました。本格的にこの道にはいったのは昭和８年。初代会長の手塚正太郎さんが保存会を設立した時です。それから、抱負ということもないんですが、文化財は神や仏と同じだと思うんです。祖先がいたからこそ現在の自分も存在するんですネ。祖先がいたからこそ現在の自分も存在するんですネ。

祖先を大切にすることは自分をも大切にするということなんです。そうした意味で、現代人は祖先のものを子孫に伝える義務があるわけです。一度壊されるともとには戻らないわけで、この心が大切だと思います。

【略歴】ペンネーム今泉砕巌で大衆小説を書く。終戦まで読売新聞記者。太平堂書店店主。

石岡市史編さん委員、同市観光協会理事、県郷土文化研究会常任理事、茨城県民俗学会理事など。

まとめ

その地域の歴史を大切にして、後世へ伝えることは当世の責務である。伝えるための手立ては様々あって、直接行動で示したり、言葉で教えたり、あるいは文字に記して伝達するなど数え上げればきりがない。

その中でも、歴史といえば文字記述が主流で、古事記や日本書紀をはじめ「常陸国風土記」や「新編常陸国誌」など著名な地誌に加え、石岡という限られた地域においても多数の地誌や旧記が書き残されている。

それについての実情を、筑波大学の岩崎宏之教授は「石岡の地誌」（昭和61年石岡市教育委員会刊）の中で、つぎのように解説している。

「近世の府中の町の有力町人層の多くは自らの系譜が常陸大掾につながることを権威の象徴とし、府中「平村」が平氏の町であることを精神的な拠りどころとしていた。そして、このような地域社会の歴史的淵源を明確にすることが、近世府中の人々の地誌研究の強烈な動機となっていたとみることが出来るのである。

本書に収めたように、近世の府中の町は、地方の一小都市にしては驚くほど多くの地誌・旧記類を生み出した。しかもこれらの地誌・旧記は、町に住む人々に読み継がれただけではなく、書写され、さらにこれに筆記者の見解が付された変種を生むなど数多い写本が流布されたことを大きな特徴としている」

地理歴史を記した地誌の数は石岡が県内でトップであり、その原動力は「このまちの歴史を後世に伝えたい」という思いに加えて、平氏ゆかりのまちであることの誇りから生れているという。

石岡の代表的地誌として「府中雑記」が著名だが、天明４年に町医者・山口仙栄が記した「常府巡覧記（常府古跡案内知るべ）」や「総社神宮祭礼評議」などは、郷土史に対する思いの深さが文中から感じ取れて、大変興味深い記録になっている。

これら江戸時代から昭和に至るまでの多くの先人の郷土への愛情に触れるにつれ、郷土の歴史を伝承することの大切さを実感する。

国民の財産である文化財を守り後世へ伝えていくために文化財保護法がある。その法律に基づき文化財を適切に保存し生かしていくのは、国や地方公共団体で、大切に護って継承していくのは国民だ。ともに役割と責務がある。

つまり、「適切に」は法令の範囲で文化財が保護され、「大切に」は思いの深さによって文化財が護られ生かされていく。

また、地方公共団体が文化財保護法の法制度の隙間を埋める独自の条例を制定したり、地域の特性を生かすための支援策を制度化するにあたっても、地域住民の文化財への愛情を育てていくことが、その政策を下支えし事業を確かなものにする。

地域の歴史を俯瞰するとき、その狭小なエリアのみを見ていては、確かな史実を読み取ることはできない。利根川の東遷のようにはるかに広い範囲と遠い将来にまで影響は広がり、その根源的な要因を把握したうえで、初めて理解が深まる。

子どもたちに伝承するのは、単に歴史の出来事や年号ではないはずだ。先人が懸命に生きたその足跡や時代を生き抜いた思いなど、史実を通して子どもたちの想像力や洞察力などいくつもの能力と可能性が育っていくための切掛けづくりだ。

そんな考えを基に、郷土史のあり方を見つめなおしてみたい。

（了）

石岡市内の史跡には、歴史についての興味深い立看板が見られます。

常陸大椽氏歴史コイス①

正一位青木稲荷所在(府中二丁目二番)平成二十一年二月

◇ エピソード～ 紫式部と常陸国

平安中期、第3代平為幹(たいらのためもと)の時代。
源氏物語の作者として有名な紫式部の異母弟である
藤原惟道(これみち)が寛仁3年(一〇一九)常陸介(ひたちのすけ)
として京より当地国府に赴任したが、翌年に病死してしまう。
為幹は未亡人となった惟道の妻の美しさから邪心を抱き、
我がものにしようとする事件を起こして京で裁きを受けたという
逸話が残っている。
また、源氏物語の中に「常陸介」という登場人物が見られる。
紫式部が創作活動の中で弟藤原惟道を意識していたかは、
定かではないが、その関連を想像することもできよう。

平成二十一年二月石岡市教育委員会

令和四年十一月二十三日石岡歴史塾Ⅱ(写)

塾長代行　羽鳥勝男

直近にて、ＮＨＫは「これからの番組紹介」があり、ＮＨＫ大河ドラマ令和六年一月からの放送は「紫式部」と決定と報じられました。主演者等の挨拶がありました。